

尼が紅

泉鏡花作

一

大尉江崎順吉氏は、堪り兼ねて、がつと行つたが、血臭く、其の變な、膠の腐れたやうなのが棒になつて咽喉許へ込上げるので我慢が成らぬ。――今は何をか包むべき、正に此れ蝮のニで。

それでも彼は、件の長蟲を持參に及んで、庭前に於て鰻がりの掴み料理と御目に懸けた、村の六兵衛一が、來た時の勢とは、がらりと時の間に容子が變つて、ぐたりと成つて、大尉が居室の前から本堂へ續く廻り縁と、向ふの卵塔場とを隔てた曲みなりの木戸を、…此の松輪寺の門内、崩掛けた鐘樓の方へ出て行くまでは、――辛うじて堪へて見送つたが。

其の六兵衛の後姿が、日盛の百日紅の下へ入つて、黒くなつて、劃然りとしたのさへ、茫と影の如く目に映つたほど、彼は氣が重く、胸が切なく、――一件

の鐘樓しゆろうの傍わきに、近ちかごろ照てりつゞ續つゞく炎えん天てんに太たい陽やうの榮えい華くわを見
よと、日射ひだしの腕かひなに花はなの輪わを投なげたやうで、何い時つが代よ
に散ちらうものか、夜よるも月つきの板いた戸ど越し、桃もも色いろの蛇じゃの目めに
成なつて、緑みどりの蚊帳かやへ影かげの射さすまで、朝あさに晚ばんに目めに染し
みた其その百ひやく日じつ紅こうの在あり處かさへ、何ど處こへ飛とんだか、赫くわつと
日輪にちりんへ附くつつて、火ひ花ばなを颯さつと迸ほとしたと見みるまで
に、一い大たい尉ゑいの瞳ひとみはぐら／＼と成なつた。

最もう六へ兵へい衛ゑいの影かげなどは、いづれへ失うせたか、全まる然で
見みえぬ。

此この六へ兵へい衛ゑいとて、三さん十じゅう分ぶん前ぜんに、同おなじ百ひやく日じつ紅こうの樹き
の下したへ、勢いきほひよく顯あらはれた時ときは、胸むねの悪わるさに見みかへられ
て、影かげも形かたちも消きえるやうな景けい氣きの無ないものではな
つた。

腹はら巻まきした、銅あか造なづりの胸むな許もと露あらはは
せ、又またと突つき出だした片かた拳こぶしに、汚よごれたりと雖いへども手て拭ぬぐひを引ひ
拵つかんだ、肩かたを斜なめに、腰こし骨ほねでぐいと極きめの、後うしろへ構かま
へて、寝ね首くびを搔かきさうに、しやつきりと提さげた竹たけの
尖さきに、じつとり重おもさうな黒くろ髪かみをずる／＼と捲まいて掛か
けた片かた端はしが、ぼたりと仰あむむけに下さがつた獲え物もの 尖と
がつた女おんなの首くびかと見みえつゝ、頭かしらから尾おへぬらめきを

持つて、仇澤が照々と脈を打ち、蒼黒い蒸氣が、烈
い日にむら／＼と立つて、親仁が竹を握つた手首へ
絡んで、胴は繩に纏れながら、草履穿いた足許へ這
つた影、畝々と蠢いて、倒に其のぼたりとする黒い
鎌首を擡げた蝮…

此の長物を、事もなげに提げた處は、天晴れ蛇を
斬つて釣鐘から躍出たかの骨柄。

で、及腰に、恚う斜違ひに廻縁の角を切つて、座
へルビしき《一敷を見込むと、横手と正面、兩方
開け擴げた十五疊の、床へ附着いた片隅に、小机を
置いて、懶げに肘を懸けて、ト其の肘にハアト形の
天窓を載せた、背面向で崩折れたと云ふ風、中形の
浴衣の机に折れた袖を洩れて、何か雜誌らしい紙の
端は見えながら、讀むでなく視めるでもなく、うと
／＼としたらしい容子だったのは大尉であつた。
腰を些と伸し氣味に、六兵衛、其の形でこれを見
ると、頭をかく／＼と二つ頷き、

「旦那、旦那々々。」

と勇ましく呼んで、

「六兵衛でがす。」

と名乗りかけたは、おのれ、やれ、組んで取られたお主の仇、躍りかゝつて、此の其の恐しい呪詛の縄で縊り殺さう氣構だつたが、呼びかけられて、直ぐにツト向直つた、大尉の、まだ大尉らしい酒ぶとりもしない、髯の細い、口許の優しい、面長な、瘦せた顔を見ると、にや／＼と笑つたもので。

「へ、や、お晝寝でがすかね、えら、お邪魔のうしますだあ、もし、」
と目を細うして、額際の汗を拭く。

「むゝ、何か、」と瘦せた大尉は、背を其のまゝで、肘の手を支きかへた。

「爺でがす、旦那様には、ちよつくら、へい、何でがすがね。」

と口を開けて、又高縁を見越して六兵衛。

「へい、何は、奥様はお留守でがすかね。」

と妙にうそ／＼。

「奥さんに用か。」

「いんえ、」

と云つて、又にやりとした。

「まあ、此方へ廻れ。――奥さんは食後に濱へ出

掛けたんだ。――」

「へゝゝゝ、そりや、へい、旨え處へ來ましたで。而したら旦那様に好えものを持つて參りましたよ。

ちよつくら御免なさりますし。」

で、腰を捻つて前へ出す。竹に絡んだ生々しい襷

は、百日紅の花の影に、物凄く友染の濡色見せて、

日の光に晃々とひだ打ち、鱗が颯と逆立つて、四五

枚金色の光を放つた。が、牝の蝮が死装束、臨終の

晴を飾つたのであつた。

六兵衛、影の輪を足に絡めて、蝮を地摺に、のそ

りと件の卵塔場の木戸を入つて、飛石を繞つて咲い

た松葉牡丹を除けながら、大尉が凭れた机の前面へ、

高縁の下なる沓脱の傍へ来て、

「これですが、旦那、」

と云つたが、無躰だと思つたらう。手柄を正面へは突出さず、竹を横手へ、螻をずりりと飛石の上へ白く下げた。

「おゝ、あつたか。」

と、大尉は其の読みさしの雑誌へ頼杖つく。

「漸やつと見附けただよ。へい、此の土用中さ、此奴が危険だで、うっかり草の中踏込めねえと云ふだけれども、扱はあ搜すと居ねえもんだ。」

聞かつせえまし、此も藪の蔭や澤の縁さ突つき搜して、私が手に引掴めえたもんでねえだね。

此の街道の踏切さ行く處に、別荘があつてね。私其處さ、出入するだが、其の別荘の坊ちやまが、お友達の書生さんと、たつた今しがたの事だね、これお不動様まあるとつて、裏田圃から砂濱へ抜けさしつけ。其の畦路の、草ン中にも居ることか、あの岩ぼこの崖路だね、草も生えねえ、早に破れて、ぼろ／＼岩の缺ら降る處に、しやつきり張つて鬼の首さ牙を噛んで、のたつて居たちうだものー危え。

潮湯治の嬢さま方、海水着の帯も緊めねえ、跣足ですた／＼通らしやる處だ。出つくはしたら何うし

べい。我武者等の坊ちやま達で僥倖だね。――

さあ、見附けたら最後、其の徒、逃しつこはねえ、砂利を浴びせる、石を放る。此奴が、

と皺びた手なりに、竹の真中を流眊に懸けると、蝮の其の畝り方が、口惜しさうにぶる／＼としたやうだつたが、六兵衛の身動きが傳つたので、首は奮のまゝぐたりとして居た。

「何と、此奴が、眞黄色に其の石礫の飛ぶ中を、黒くなつて、ぴん／＼、飛んだり、匆ねたりで、なか／＼以て手におへねえ。

「行つて來う、往かう。」

「畜生、歸途に殺して遣る。」

何處へも行くなつて、其のまんま通り抜けて、坊ちやま達あ御堂へ行きつけ。可い加減に遊ん

だりの、お腹が空いたで、晝飯にすた／＼歸つて來さつしやると、何と、へい、奮の處に、然も、へい、のいと菱形の鎌首を擡げて、其もさ、今度アぐるりと此方向きで睨んだ形體。

「わあ、」

「殺せえ。」

と二人とも躍上つて、夢中での、滅茶苦茶に、

へい、漸やっとなやしつけた。何が、これ、なやして
へば三尺じやくた足らずの蟲むしだけれども、容易よういな事ことでは納をさま
んねえで、災えんてん天てんに砂煙すなけむりを上げて働はたらかした時は、岩いは
の根ねさ打ぶつかる浪なみが黒くろかけ、此この長物ながものさ、火繩ひなはの
やうに赤あかくなつて勿はねたと言いふだね。

海松みゑの枝えだ、拾ひろつて來きて、眞中まんなかへぶら提さげて、ぎい
らぎら、畦道あぜみちさお別莊べつさうの裏木戸うらきどへ歸かへつて來きさつしや
る處ところへ、私わし、晝休ひるやすみに、又また、へい、茶ちやの御馳走ごちそうに成な
つて、狸たぬき話ばなしでもして聞きかせますべし思おもつて、
湯殿口ゆどのぐちからお縁側えんがはさ、奥様おくさまのへい、海水かいすゐ着干ぬぎほした棹さ
の下潜したくゞつて、ひよつこりと出でて出會でつくはしたもんでがす。

其處そこでへい、

と又汗またあせを拭ふいた。

「旦那様、此の生肝を薬にせるとツて、見つかり次第に一條提げて来ようと頼まれて居たもんだで、

『坊ちやまな、爺やに其をくれさつせえ。』

で、壇詰めにして焼酎に浸けるちゆうを、譯さ話して貰つて来たゞが。

前の内は厭だと言つけ。

露西亞との戦争に、豪ら手柄をなされた旦那様だよ。一年あ少えが、其の手柄に因つて、大尉殿に成らした。何せい波の上の修羅場では、夜の目も寝ねえで、辛勞さした、其の疲勞が出て身體悪く成つて、半年にも一年にも夜が寝られねえ、困つた疾病。お友達の軍醫殿、町方の醫師方も匙を投げたの、まづ、氣を鎮めて靜に休まつしやるが何よりだちゆうで、此の夏を、村の松輪寺へ御夫婦で来てござります。

がの、矢張お鹽梅が悪いもんだで、其處で或人が言ふには、蝮の生肝 鷄呑みにするだ。すると、へい、心の弱つたには、凡そ此のくれぬ効力の可えものはねえ、立處に驗が顯れると言ふもんだで、私

が頼まれて捜して居ますだ。

然う言ふと、あれだよ。

「さあ持つてけ。」

ツて、さくゝ投出してくれさしつけ。旦那様の前だがね、坊ちやまも今に海軍にならつしやるちゆうで、お大將へ御奉公だね、旦那様の前だけれだよ。

「己たちを待つて、お剩に首を向けかへて居た奴だ、肝は屹と大いぜ。」

お友達が言はつしやる。

そりや可えが、足許へずるりと迂らかして寄越さした長い奴めが、たわいがねえと思ふ、と違ふだ。何か言ふ内に、脊筋を立てゝ、のろりと返つて、ぐいと、植込へ首を突込む。

「あれ。」

つて奥様は遁げさつしやる。あわア食つて私、へい、手拭で、其の頭押伏せると、齒向いて、かしり、と噛みついた處へ、坊ちやまが、此の竹さ投出してくれさしつたで、ポカ／＼と遣つたでがさ。弱る處を引離いて、へい、踏切り線路から大廻りに恚うやつて持つて来たがね。町を突切りや近えだけんども、小兒衆まじりに多えこと女衆が遊びに来て、其處

ら歩行あほいてこさるもんだで、又また然さうでもねえ、青大あをだいし將やうとは違ちがふ。此こいつ奴がが刎はな出すめえとも限かぎらねえ、怪我けがをさしてはなんねえと思おもつた事ことでね。へい、それにや生肝いきぎもさ入用にふようだ言いはつしやるけえ、殺ころ切しきれば仔細しさいねえだが然さうはなんねえ。えら氣きを揉もんで持もつて來きました、へい。」

先刻さつきから頼杖ほづつしたまゝ、目めを塞ふさいで、半なかば、坐睡あねむりするやう、時々とき／＼、うと／＼しながら、可い加減かげんに黙たまくつて頷うなづいて居ゐた大尉たいゐは、こゝで、細ほそく目めを開あけたが、何なんの其その、二卷ふたまき招まいた長蟲ながむしも、蚯蚓みづずぐらゐるとしか視ながめなかつた。

「あゝ、御苦勞ごくらう々々。」

と又また一つ輕かるく頷うなづく。

六兵衛べゑ、勞ねひはれてほく／＼もので、

「や、何なに、そねえな事ことさ何でもねえだが、私わし、苦く勞らうにしたは、奥様おくさまだよ。此この間あひだ、晚ばんげえ、旦だんな様御さま酒しゆさ飲のまつしやりながら、私わしに、此この註文ちうもんさつせえた時とき、奥様おくさまは、へい、話はなしだけでも身みぶるひして、
『爺ぢいや不可いけいよ、屹きつとだよ、持もつて來きては厭いやだよ。』

『馬鹿ばかな、き様さま。』

と旦那様は言はしつげが、へい、こりや奥様は無
理イねえね。

けんども、へい、弄物や慰物にさつしやるでねえ。
薬だと言ふけえ、私も氣い揉んで、初中眼さあ押
ぱだけで、見えたらござれ、掴めえべいで、漸と一
尾手に入れつけ。何うだかな、鹽梅式、奥様居さつ
しやらねえければ可え工合だが思つてね、へい、お
寺の門は潜つても、うつかりとは面ア出さねえ。

しばらく鐘撞堂の裏へ踏込んで、本堂から庫裏
の方、お座敷は第一、ぎよるり／＼、晝強盗見たや
うに、野天にへい、眼玉びかつかせて、はッはッは
ッ。

何うやら居さつしやらねえやうだから、のつそり
出て来たゞが、油斷なんねえ。背へ得手物押隠して、
旦那様呼ばはつたゞつけよ。

もの、これが、又見さつせえまし、襷には掛けら
れず、帯にはならず。はッはッはッ、帯にや
短し襷に長し、もの唄でがさ。

「あゝ、唄だよ。」
と大尉はうと／＼。

四

「旦那様。」

「首か、」

と言つて大尉は愕然として目を開いた。――

唐突の此の「首か」に、六兵衛は、あつとも言はず、眼を睜つたなり緊乎と拳を握つて、

「う、へい。」

と言ふ。ト其の顔を凝と瞻めた、瞳が据つて、大尉の顔の筋がびく／＼動く。

六兵衛、食切るやうな口附して、少時して、

「肝、肝ですが旦那、蝮の生肝を抜いたですが

よ。」と握つた拳をぶる／＼と震はす。

大尉は吻と息して、

「あゝ、肝か。」

「肝ですがね、」

「はゝ、」

と寂しく笑つて、優しい髭を押捻つて、

「己は首かと思つた。」

「首を食べるかね、首は其處へ切つ放して置いたゞ
けんど 私はい、薬にさつしやるは生肝だと

聞いたもんだで、」

「何、蝮は生肝だが、己は生首かと思つたんだ。人間の、露西亞兵の、ロスケのよ。」

「え、ロスケの首、」

と六兵衛は怪轉する。

いや、怪轉も道理。大尉は今實にとろ／＼としたのであつた。――

「然うか、夢か、」

と、自分で濁言のやうに言つて、

「あ、然うだ、お前が今、蝮の腹を裂くと言つたな。」

「へい、」

「で、小刀を貸せと言ふから床の間にあつたのを渡した。」

「へい、此方の手に持つてるだがね、」
と中風のやうにぶら下げたり。

「臺なし、もの、蒼いやうな、黒いやうな、血みどる血げえにしつけえ。だからお前様、此の切物さ、此中も見ただら、奥様が、へい、旦那の麥酒の肴にせるつて、梨の皮剥かつしやつた小刀だ、蝮を料理つたら悪かんべいちうたけんど、お前様、構はね

え言はつしやるもんだで。ひやあ後に洗ふべいさ。」

と帯に狭んだ手拭で、ぐいと一ツ手拭をすると、つ
るりと、辻つたらしく、鼻の尖へ當てがつて、フン
と嗅ぐ。

「何、小刀が何うだとも言ふんぢやない。而して俎
板のかはりに何か持出したつけな、むゝ、然うだ。」

と頤杖の一つをはづして、机の縁を壓へて言つた。

「縁側にあつた蠟燭箱。…」

「其でがさ、土釜とへい、紙屑と一所に入つて其處
に手水鉢の傍にある、其の大な箱の蓋でがさ。」

お寺から借物でござらつしやるべい。それなら、
へい、蓋一枚打棄つたつて仔細はねえだよ。」

「然う、そりや構はないのよ。ーで、其の飛石の
上へ直して、き様、向うむきに膝を割つて躡みなが
ら始めたんだ、丁ど其の何だ、一輪、桔梗の花の咲
いた下で、」

と言ふ、つい沓脱の前の飛石の傍に、すつくり
と紅の勝つた紫に、日盛を咲いて居る。

此の日中は花も夢中で、自分ながら、扨て色も姿も

辨へまい。露重たげに打首垂れた風情こそ、覺めて
装を凝らしたので、恚う威嚴正しく暑さにめげな
い時は、秋の草は寝て居るのである。一だから、偶々
蝶が來ても、夏の午は幻の影ばかり、朦朧とあ
るのが多い。
で、向うの藪だゝみから、晝顔が、白い面で、ほら
／＼と覗いて笑ふが、風もなければ、誘はれもしな
いで、しゃん、と咲く。
咲いたのは此の一輪ながら、桔梗は飛石の其處此處
に、五本とは株にならず、二本三本づゝすら／＼と
伸びて、庭を綺麗に、土に埃も置かず掃き清めてあ
るだけに、尚脊高く根じめの草が欲しさうに見える。
次手だから言はう。此の松輪寺は眞言宗で、住職は
六十歳つと聞えた恐ろしく脚の長い、脊の高い、杖
を支いたら木登りしやんせと言ひたい骨法師で、こ
れに齊眉く尼が一人。臺所萬端、寺男なしに庭
掃除まで手一つで老實に働く。其處らに塵ツ葉のこ
ぼれて居ないのも、いづれ尼の丹精で、桔梗だけ残
したも其のすさび歟。丈の伸びたは氣に成るが、尼
が女郎花でない以上は、桔梗は上人とかゝはりない。

紫の由縁の色は、大尉の夫人のためにこそ、

一本庭前に咲出でたものとは思はるゝ。――

彼の女は、海へ行つて今此處には居らぬが、奥さんが留守中の薄眠い大尉の目には、桔梗の其の立姿が、其處にイむ夫人の倂に髣髴として映つて居た。一輪、其の紫の花の下へ、臘燭の折の蓋がぴたんと置かれて、眞直に腹を割るべく、六兵衛の手に、軀がのたりと成つて伸びた時は、二片三片、葉の影ながら、鱗の色は蒼褪めて、蝮は死相を露したものであつた。

が、扱帯が解けたほどにも、蟲の生死に懸念せぬ大尉は、然りともなく、唯茫乎と視めて居ると

「其の何だ 桔梗の花が澆と恚う大きく成つて、其のかはり色が薄くなつて、其處等へ、然として青い環が出来たと思へ、 さまき様。」

奥さんが海水を遣つてる頃だと云ふのが心にあつた其の為めかな。其の青いのが水に見えて、のた／＼と波を打つ――

何の蝮の腹が、びく／＼、のた打ったのかも分らんな、爺や。き様が其の中で、ぢよき／＼小刀を使ふ手附きが抜手を切つて泳ぐやうで、大潮の中をぶく／＼遣る

頭の髪が赤く成つて、露西亞兵に變じたんだ。」

「露西亞兵に、」

「むゝ、其の首がころりと落ちて、」

「わあゝ、」

と言つたが、小刀と、肝で、兩手とも塞つて居るから、ぶる／＼と猪首を窘めて、厭な顔色。

水雷艇の舷を、ぶつくりこと、青い提灯

ぢやない、颯と探海燈の光で飛ぶのだ。

處を唐突に呼ばれたから、其の首が來たか、と思つ

た、あゝ、」

と滅入込んだ欠伸を一ツ、生嚙にして留めた。

「然うか、肝か、注文の生肝が取れたのかい。」

「へい、」

で以て六兵衛は、己が肝を抜かれた容體。

「見せろ、どれ。」

と起ちもやらず、座も動かさないで、机越に猿臂を出すのが、式の如き妙薬を服するには、餘り無

雑作な舉動で。

龍の額の珠とこそ謂はね、故事來歴までもない、別荘の和子たちが崖路の行還、戦ひ再度に及んで、火花を散らして退治してから、手拭で壓へつけて、途中を憂慮ひつゝ、寺の門へ運んで来て、鐘撞堂の蔭へ踞んだ心遣も現にある。處を、珍しい葦ほどにも氣にしないで、然う又平氣に食指を出した處が、六兵衛聊か腑に落ちない。

「旦那、よくへい、目のう覺めたゞかね、可厭な夢だ、現にしても好くねえだね。六兵衛の首さころりは縁起でねえ。」

「露助に成つたから可いではないか。馬鹿だな。」
「然うかね、へい、だらまあ、そりや可えが、お前様何うさつせる。太い丸薬にしても、鵜呑は咽喉に支へるだあもの。何うやら、へい、びツく／＼、脈を打つて、掌で息吹くだがね。何か、へい、生暖とく、冷こい、こりや生肝だで活きてるだよ。」

「手の筋へ自分の血が通ふんだ。堅乎握つて居るからだらう。又何だつて、然う拳を石のやうにして搥んでるんだ。」

「ほう、」

とはじめて知つたか、引搦んで固くした握拳
を鼻の先へ、我が手に突向けて熟と見ると、

「首か、」と言はれて、驚いた拍子に、ハツと
搦んだまゝで居たのに心着いて、六兵衛、我と苦
笑。

「へゝ、蝮めが甚ら惜んで、鎌首さ飛んで来て取
返すめえもんでもねえと考へたで、うむとへい、握
つてこました。旦那、私、あれだ、のたくつた死骸
の上で、雷様ごろつかねえければ可いと思つと
るくらゐですがすよ。大事なもんだね、へい、」

で、開けようとすると、指が、がつしり！

「や、何うしたぞ、これ、附着いた。あれ、はて、

これは、やあ、これは。」

と慌てるまゝに、小刀の尖で、こじりかける。

「危い、怪我をする。」

と大尉は縁へずつと出た。

「爺や、き様にしては感心だぜ。その手に引握つて居たのは弱るが、桔梗の葉に載せて居つたので通りが可かつた。胸が空いた。あゝ、目が覺めた。」

と其でも、浴衣の上から襟の下へ一つ撫でながら、大尉は片膝立てに成つて言ふ。

時に六兵衛は、さすが、吾が手を下した螻の、其の生肝を、まざ／＼と嚙込む處を、正的に見るに堪へなかつたか、それとも、截割つた體の跡始末をする積りか、沓脱の前面へ下つて、日の眞下に、桔梗の花を蔽ひながら、影短かに突立つて、熟と、足許に取亂した俎の上を視めて居た。がー少時何にも言はなかつたー何うして音に聞いた金鷄勳章に對しても、可愛い悴は水兵なり、大尉殿がお言下し置かれるのに、やはか返事に猶豫、ふ親仁でないのが、黙然たりしも道理にこそ。

「あッ。」

と言ふと、横ざまに飛開いた、顔の筋が、鼻と、口と、引釣り、引張り、爪尖を揃へた膝がく／＼で、はあ／＼急いで、

「旦、旦、旦那、」

「何うした。」

「旦那、」

「何うしたんだ。」

「へい、」

「笠も被らないで、炎天に久しい間、心持でもよくないか。」

「いんえ、」

ぶる／＼と頭を振つたが、横歩行に、あとを見い／＼、蠅の骸を沓脱へ遠退いて、

「見、見さつせえ。」

と下の方へ緊乎差した、不細工な指をちやつと引込め、

「豪えもんだ、へい、恐ろしい、あの死骸を見さつせえまし、まあ是。」

とごツくり唾を呑んで目を瞻る。

「首が口でも開けたかい。」

「首が口、首、首が口。」

「口が何うした。何を慌てる。」

「開けたから噛んだ、噛んだがす。」

「噛まれたか、指を噛まれたか。」

「然、然うではねえだよ。」

とずり退るやうに縁側へ身を躍つて、足を搦んで、片手支の腰が据らず。

「私、へい、此の年に成るだけけれど、初めて見た。旦那、蝮は未だ死にましねえだよ。」

「うむ、動いてるか、蜥蜴の尻尾も同一だ。」

と一向に氣に懸けぬ。

「尻尾、尻尾ぢやござりましねえ、頭だがね。もの、其の鎌首さ、一番がけに、其處な小刀で、チヨン切つた事は切つたよ。」

へい、鼈には、庖丁見せて、赫と、奴が成る處を、藁すべを口へ當てるだ。口惜紛れに喰つく拍子に、ボンと落す。でねえと其の、一念が虚空へ飛んで、料理人の咽喉首へ食ひつくとね、こりや、へい現にあるこんで。

蝮だで、其にも及ぶめえ思つた。是とてもでが

すー道具があれば鰻突きに、ト俎へ縫ひつけて置くだけんども、其のさもし、眞鍮の火箸では弱いもんだで。又然うでもあんめえ、半死半生の腹を割くで、苦紛れに鎌首さ持立て、食ひつかれては

大事だと思つたけえ。

最初、首根子をぢよつきり遣つた。動きましねえ。向うの藪、疊の方さ突向いて静と据つとるで、はて、正體なく最う斃死つたかな、思ひ／＼、輪形の切口のう、つぶ／＼と遣りかけると、ひやあ、それ、胸中あたりと思、ふ時さ、ぶるりと來た、大のたを横に打つて、巻き上つてニくだよ。なにが、其のくれえなことさ朝飯前だで、

『やい、これ』

ツてぐるり／＼巻戻して、壓へつけて截割つただがね。へい、横のたを打つたも道理。お前様、此の蝮さ胸が太い思つたも違ふ道理かな。腹の中に、七寸ばかり、蚯蚓に鼻が生えて鱗の立つたやうな兒が居たゞよ。小刀は、親雌の腹をかけて、子蟲の胸中斜つかひに裂き破つけ。――

何の年の何の月日揃つたちゆう腹籠りも何も用はねえ。生肝さ御入用だで、ずだ／＼な親蝮、兒蝮、打棄つて、肝の臓を指の尖で血わたぐるみ引摺り出して進げた、――

と話す、指の尖がむづ／＼か、頻に縁側に引摺るが、六兵衛は無意識らしい。

「海鼠綿のやうなものさ、ふる／＼引からまつて、
 附着いて抜けた奴を、小刀の腹で、べたと扱いて、
 俎板へなすりつける、とひやあ、最う此の炎天干だ、
 青膨れに色が悪い。」

「新しい肝だで、大事に桔梗の葉の中さ、押包んで
 持つて來けえよ。」

「そりや可えだが、へい、薬さ濟んだら早く臍物の
 押片けべい。蝮の店開きな、又尼さまにでも見付
 ったら厭な顔されるだ思つて、始末に掛らうとする
 と、あれですが、其の、」

と胸毛を揺つて、息を吐いて、

「あれだ！ 鎌首が。あれ見さつせえ、咽喉輪の
 裂口を逆にへい、向うから、じりりと來て、己の胸
 中へひとりでに乗つかつて、え、斜に切れた、あ
 の、其の、腹籠りの小蛇の頭を、がりりと、其の、
 引咬んで、あれ／＼此方を向いて、眼なア白く半眼
 に見据ゑて、ひいく／＼尖鼻のづべらつとし
 た奴で、ふツ／＼息を吹く、切口の肉が動いとるだ
 もの。何うしべい、旦那、あれ、あれだ。」

と言ひ／＼、六兵衛は片膝縁にかけて、遁身に半身を摺上り、氣に成るかして其方向の目も放たず。

ト是を聞くと、絶えず捻つて居た髯の尖で、膠着いたやうに指が留まつた。大尉は胸をや

机に乗つて、前にかけて、まだ板の上に擦り留めない、六兵衛の太い指のかさ／＼として黒いのを熟と見ながら、

「何、蝮の首が歩行いて來て、腹籠を銜へとるんか！」

「やあ、あの通り、此方に向いて、うゝ、それ、旦那。」

「誰が、誰が兒持の蝮を割けと言つた。」
と額の兩方から突寄せた如くに其の眉を顰めたのである。

親仁はきよとん。

大尉も我知らず不快の餘りつい口へ出した、自分の無理に逸早く心付いたか、聲を強ひて落着けて、

「可いから、打棄れ。」

「へい、」

「打棄つ了へよ。其處に置くから氣に成るんだ、

馬鹿な。」

「でがすがね、旦那、」

「見なけりや可いではないか。」

「だけんど、私へい、見たゞからね。」

「見たから打棄れと言ふんぢやないか。」

「私、へい、手が着けられましねえだ。旦那様の

前だけんど…何うもへい、何とも切裂えた奴が一

ツ活きとるだて、約と五六疋刎なくツとるだね。鬼

の首が、へい、指圖さして、巻けたら巻きつく、噛

めたら咬むべい。もの、此のまんまにして私遁げて

え。太陽干に乾固まれば、後で鱗のある蛇に化けて

も、此の長えのよか始末が可えだで え、些

とべい行つて参じます。」

大尉は慌しく膝で留めて、

「打棄つて行つちや不可ん。」

「尼様が見ればとつて、濟んだ跡だら何も理窟の

う言ひますめえ。次手にあの働き人だで、其處等打

坐込むやうな腰附で、ちやノ、らちやつと掃出して

くんさるだんべい。尚と可えだで、へい、私これで

御免なさりましたよ。」

と眞個に思入つて頭を下げる。

「不可ん、不可んぞ、き様、其を打棄つて置かれ
て堪るものか。尼さんは言句を言はないでも、今に
歸る　　：奥さんが見たら何うする　　奥さんも腹
に兒があるんだ。」

あゝ、一ツは、其がためにも神経衰弱の此の病
疾、奇薬と言へば、蝮の肝を嚙んでもと思つた
大尉は顔の色もやゝ變つて、

「打棄れえ！　親仁。」

と言つた。一聲が、部下に命ずる號令の如きもの
であつたから、六兵衛、はツと畏縮して、返すべき
言葉も出ず　　勿論其の位ならば御自身にとも言
ひ出さねば、自分が、と大尉の考へる暇もなかつた。

まるで夢中　　密と臘燭箱の蓋を取る、トふら
／＼と漂ふ腰附、反りかへり状に奮みかゝつて、

「七里潔ばい、わツ」

と唸つて、正面の藪　　疊へ投げ出した。が、据
らぬ體の拍子が狂つて、件の軀は、炎天を飛ぶ板一
枚、颯と流れて横なぐれに、ぞろりと卵塔場の片隅
へ落ちて消える、と赤い砂がばつと揚る。

途端に其處等ぢり／＼と蟬が鳴出す。低く来て、蜻蛉の羽が、ぴかりと桔梗の葉を掠つた。が、いづれ親類にしる、他人にしる、式の如き長蟲が、然ばかり苦悶の最期に對して、暫時息を詰めて居たものらしい。

で、庭も、境内も、本堂から座敷へかけ、卵塔場から四邊の山へ颯と展けて、其の邊が闊と廣くなつた。――

障子を開放してあれば、縁も高し、鐘撞堂の藁屋根に草の戦ぐのも見えて、門前の松原を吹いて通る風が涼しい。

惟ふに惡辣なる龍種の一屬、將に其の屠られむとするや、眼を瞋らして野を蔽ひ、尾を揮つて山を隠し、のたうつ膚に世を狭めて、障子も柱もぎり／＼、囓寄せたらう。風も雨も起さぬけれども、桔梗のもとは暗かつた。

ト大尉は、其の首の執念を聞いたにつけて、あらぬ事をフト思ふ。

併し先づ、六兵衛は、現物のあつて爪先に蠢めか

ないのに、一安心も、二安堵もして、漸つと荷を下
ろしたと云ふ様子。脇の下の汗をぐい／＼と袖を通
して拭いたりける 手拭を、はだかつた胸にぶ
らりと入れた、此が又長蟲の尾に見える ・厭な
顔して、無言の大尉に、塵を拂つた揉手をして、
「旦那、可恐い執念の深い蟲でがす。随分へい殺
生も私したもんだがね、こんな厭らしい心持さつひ
ぞ覺えましねえだ。えゝ、凡夫壮だて、觀音院の
少い坊様、何い吐くか思つたけんど 聞かつせ
えまし、蠅さ仇をしねえ禁呪ちう御詠歌があるだよ。
ものー ー いく前にだ、旦那、」

「何、」
と大尉は氣が重いので生返事で居た。

「すぐ前に だね。」
「行く前にか、」

「ひやあ、然うだんべい。行く前にさ。」
「行く前が何うしたんだ。」

と少し焦れたは、 一つ言を二度言はれるだ
け、最う些とづゝ、あの其の一瞬にした奴が、ぐい、
と胃の腑から持上るのであつた。

是より前、棗を溝に浸したやうで、 紫 がゝつ

て淀りとして、ぶす／＼と血沫の噴く其の肝を、桔梗の葉から、近らして、湯呑の微温湯で、一息に服した時は、えごくも溢くも感ぜず、煙草の脂を嘗めたほどにも思はないで、うい奴などと六兵衛に賞言葉で、澄まして、ける／＼としたものだつたが

一度首の執念、然も腹籠りの小蛇の條に喰ついたと聞くと同時に、其の元氣では早く既に、溶けて煉薬に成つて居さうな筈の肝が、キヤリとして、むく／＼と胸の下で應へた。切て、がツと鳴つて、一堪りもなく突き上げさうに成つたものを！

不淨を除けると、胸が透かうと、急つて軀を棄てさせると 俎か上つた時、一所に胃の中が動揺して、ドンと六兵衛が投げるはずみに、ツイと込み上げて、あはや、進つて出さうになつた處を、うゝうゝ、と冷汗に成つて揉堪へた。が、庭は清めても、腹は洗はず、妙に胃袋がむら／＼と爛つて、他愛なく、其の癖、胸はと言ふと板を張つたやうに堅い。

此の折から、生ぬるい、同一ことを繰返されて、齒の間へツツと唾が走るのを、ぐちやりと嚙んで、又、胸を悪くして苦切る。

六兵衛 聊も察せずして、

「其處で、聞かつせえまし、もの、歌ちう、其でがす。

行く前に鹿の子斑の蟲這はゞ

山たつ姫のありと教へむ。

此のさ、もし、鹿の子斑の蟲ちゆうは、蠅のこん

だね。山たつ姫は猪でかすとの。凡そ山谷かけて、

蠅にへい向つては、猪ほど強いものはねえちゆ

かひな、爰が理合たねー鹿の子斑の蟲這はゞ山た

つ姫のありと教へむ。ー

旦那様もへい、念のために禁呪はつせえまし。あ

んねえ執念のかゝつた奴ぢやけに、どんな事で、又

仇をしめえもんでもねえで。

だが、もし、其だけにへい、生肝は嘸利きますべ

い。

此の嘸利かうが、又づつしりと胸へ利いた。思は

ず、かつと言ひさうに成るのを、眉根を寄せて嚙殺

す。

其の色艶を伺つて、

「旦那、何うかさせえましたか。」

「睡^{ねむ}いんだ、最^もうお歸^{かへ}り、」と堪^{こら}へ兼ね^かたが、不^ふ便^{べん}や親^{おやぢ}仁^にの所^せ為^ゐではない。で勤^{つと}めて聲^{こゑ}を優^{やさ}しく、
「禮^{れい}をするよ、な、禮^{れい}をするよ、」

否、飛でもない、然らぬだに慄毛を震ふ處、利慾のために行つたとあつては、命のほども覺束ない、と眞劍に六兵衛、頭を掉つて、

「旦那様、御免なせえまし。」とぼ／＼と行く前に、

「鹿の子斑の蟲這はゞ、」

で、卵塔場の方を横目にかけて、青菜に鹽のぐつたりと成つて――さて、百日紅の花の蔭から鐘撞堂を寂しく歸ると見送ると、最う其の色が赫と瞳を射て、頬が熱く額が重い。大尉の目は

くら／＼とした。一體、親仁の前なり、我慢もあつて、其まで押堪へ揉殺して居た腹中のこだはりが、いや、尾籠ながら、ウイと吐げて咽喉へ來ると、得も言はれぬ、青い、腥い臭氣が芬とする。

「あゝ、」

と身悶えして、我にもあらず机に突伏さうとする途端に、背後で、

「ふえへ、」

と云ふ、底力のない、ぼやけて濁つた笑が、天

井の隅から鴨居越にぶはりと来て背中へ負さつたー
古寺なりと言つて夏の日中、敢て怪むには當らぬ。
何時も聞馴れた當時の尼の音聲。但し才藏の笑は
仕來りの嘉例でお儀式なり、落語家の其は家業の賣
物で別條なしたが、手品師が笑ふのは意味が分らぬ、
と一般で、此の尼の笑ふのも、彼の女の來歴と同然
一向に素性が知れぬ。

素性の知れない笑と云ふものは、お互に氣味が惡
い。然も尼は何でも笑ふ。まづ此の頃で言へば、や
れ暑い、それ暑いで、ぶつ／＼濁言しながら立働
いて居る時でも、猫を叱つて居る時でも、鳥を追つ
て居る時でも、人を見れば必ずにやりと来て「ふえ
へ」と行る。

其の顔が　だふりと黄色に膨れた丸顔、小鼻
から頬へ掛けて、朱色がさして、照々と艶持つ濕澤。
總身の皮が弛んで、ぶよ／＼とした肥肉の小造で、
小さな天窗がもじや／＼と薄黒く、而して前齒が仇
白い。其の齒を莞ツと遣ると、目皺が寄つて、上
脛がぶるツと震ふ。額が日に焼けて皺ながら
の汚點斑で、眉のあたりに猫の髻のやうな毛が疎で、
旭に透かすと、すい／＼と露れる。

年紀は幾つだか能く分らぬ。南は九州薩摩瀧邊の
出生とあつて、西國四國諸國遍路、當松輪寺へも同
じく杖と笠で笠で辿り着いたが、佛縁があつたか、草鞋
を解いて、件の脚長上人とゝもに、本尊に齋負いて、
やがて三年になると聞く。

お經も誦めば、鐘も鳴らす。針仕事もすれば飯も
炊く。齒の痛、蟲封じ、安産の祈祷など立處に其
の驗を顯す、とあつて、參詣の老弱男女、これを尼
公は僭上なり、尼御前は時代に過ぎる、尼さんも
餘り露骨と心得たか、誰云ふとなく「お尼さん」
（お尼さん」と申して信仰する。

現在。――

大尉の其の夫人が、近い頃、渚の巖間をぼちや／
＼と素足で渡つて、蹠へむざとした刺を刺した
が、薄皮に沈んで壓しても抜けず、纖弱い女、雪の
やうな足を震はして惱むのに氣を揉んで、大尉が縫
針で穿出さうと言ふのを、危ながつて身を縮める、
髪を揺る、眉を顰める、果は、

「あれ／＼、」

と言つて遁出す――

睦じいのは何も慰樂。

「臆病者、腐らぬ内切つて取るぞ。」と洋劍を抜いて、すらりと出す。

「あれえ、」

と裾もはら／＼で、痛い足を飛上つて、本堂へ遁出すのを、どたばた／＼追廻すー處へ、お尼さん、臺所から、ひよつこり出會つて、

「ふえへ、」

と笑つて乃ち、何か知らず、黒焼の粉薬を、飯糊に煉合せて、ベタリと貼つたが、一夜にして創も残さず、刺を皆吸取つた。

が、こんな事は、些とも其の和りとする説明にはならぬので、お尼さんの笑ふのは、矢張其の仔細が些とも分らぬ。

此の際大尉は、氷でも抱きたい胸に、ヒヤリと透つてキヤツと抉る、猿の聲でも聞きたい處
 「ふえへ」には一際弱つた。

聲ばかりか、最う其を聞くと、早や汚點のある額、仇白い齒、ぶる／＼とする上、瞼が、まざ／＼と腦に浸み込む。

ト振返れば、ソレ果せる哉、果せる哉。

尼は、がらんとした寺の内へ抜出た形で、大尉が借住居の縦に長い此の十五疊の廣書院と、敷居を隔てた本堂との間、固より吹通しに遙か向うの破障子

其處は一段低く下りる臺所口の二枚戸まで開廣げの、四五本すか／＼と見える黒い柱の、最も近い入口の一本に、遮る物もなく身を凭せたが、寂とした本堂の板敷へ、氣勢を籠めて、薄黒くも又黄色に顯れて、熟と此方を見込みながら、件の仇白い笑を、唇から泡の如く、はみ出させて立つて居た。

大尉の振向いた顔を見て又、

「ふえへ、」

と笑つた。

大尉はむかつとして、苦切つたが、尼の上瞼はぶ
る／＼と震へて、西國四國諸國遍路の、殆ど系統の
分らぬ音で、

「お暑いこんでござりますえ。なう、」

と和笑る。

大尉の咽喉は、ぐうと鳴つた。静と堪へて、

「暑いです。」

「眞個、お暑いこつちやえの、」

と言つた切きり：法衣ではない、布のちやん／＼を
抜衣紋の、膨らんだ黄色い背をふはりと背後向きに
成つたが、すぐにふは／＼と鼠の腰布が動いて、本
堂を斜めに、時代に煤光りのする廣い板敷を、皮た
るみのした太脛を揃へて揺つて、すい／＼と去つた
が、やがて件の臺所口の破障子へ、其でも穴からで
はなく、すたと入つて見えなく成つた。

途中の状が、宛然土蜘蛛でも這出す體。

何の事やら八テ得體が知れぬ。此の日中を唯

暑いとだけ會釋して、用は最うそれで濟んだ風で、
さつ／＼と臺所へ引込んだ。餘り誹へたやうな立際
が、何うやら其までに思ふだけの事はして了つたも

のゝやうに見える。

とすると、先刻から同一所に立つて居たやうでもある。薩張ものに紛れたが、扱ては六兵衛が蠅を料理つた一伍一什を視めて居たか、或は跡始末のあたりから居合せたか。

兎に角、寺の庭で殺生をしたとも何とも言句はな
いから、鼻にして可い。

可いが、しかし胸の悪さは些とも薄らぐぬ。ばかりでなく、尼の姿、其の顔色、件の「ふえへ」で、一層ねば／＼と口が粘る。恰も以て目に膠を流した
氣持。

「堪らん、あゝ、」
と仰向けに背後へ手を支き、反返るが如く胸を伸
して、目を瞑つて、ぐつと押下げようとすると、ぶ
つ／＼、と動いて支へる。

握拳で、ドンと敲いて、
「何だ、馬鹿な。」

で、ハツと氣を變へて、居直り状に、ぱつちり兩
眼を開いて、土瓶の底の片傾つて灰に塗れた、火鉢
の縁に手を懸ける、と其處に差置いた湯呑が目に着
く。

先刻、生肝を嚙む時注いだのが、咽喉の通りが好
かつたゝめ、半ばも乾さず、まだ其のまゝに湯が殘
つた。

假の世帯は、一つ茶碗を夫人も使ふ。：
近ごろの女は、初々しくても口紅のあとは染めぬが、フ
ト見ると、梅の花片、薄り唇の影が映す。

さそくの清涼劑に、つと茶碗を取つて、そんな中
でも大尉は莞爾、何も忘れて一口にぐつと吞まうと
すると、湯も泡立たぬに、呀！

其の臭氣！

胸のを吐出したら、むら／＼といきれが立つて、
と思ふのが、ツンと強く鼻を刺す、蝮の移香堪ふべ
しや。

「うむ、」

と言ひ状、ドンと投げると、湯もこぼれずに縁を
躍つて、颯と桔梗の葉に覆つて、からりと葉陰に破
れて散つた。

「畜生！」

はたと睨んで、大尉はぶる／＼と火鉢を揺つた。

それから暫時の間、彼は堅く其の腕を組んだ肩を
 聳やかして、桔梗の下を飛石かけて、庭下駄で、茶
 碗の缺を蹂躪り蹂躪り、めつた矢鱈に蹴附けたので
 ある。

皆は上つて、眉は顰んで、額に青筋を敵らし
 たが、唇には著しい冷笑を浮べて居る。蓋
 し自から其の躁狂の態度を嘲つたのであるが、嘲
 けらるゝ當人さへ氣随せに制し得ないのは、此の二
 三ヶ月は特に獨り悶えながら夜が寝られぬ破つたか
 然うだ、桔梗に水を遣つたと言はう。丁ど飲みさ
 しの湯が溢れて飛石も濡れた。「と思つた。最う
 其時、夫人が寺の門の松原まで歸つて居ても、歩
 いて此處へ来る間には、此の日盛を何乾くまい？
 一體、鐘撞堂を背後に置いて、百日紅も其方
 に赫耀とある古寺の庭に、日本海々戦當日、水雷艇
 を指揮した天晴勇士が、獨り佇立してこんな事を考
 へると言ふも螻の祟ー否、疾病である。
 剩へ夫人は今ごろ、未だ眞蒼な浪打際に、素足で
 富士でも視めて居よう。

「尤も朝顔ぢやない、炎天に水を遣るも可笑いが、
其が可笑いと言つて莞爾しやう、」

あの美しい唇で、優しい眉を開いて、と紫
の花片に、其の涕を宿して視めて、大尉は寂し
く微笑んだ。

追つゝけ其の顔が見えるとして、何時の如
く、己は億劫だから海へは行かぬ、雑誌を讀んで寝
轉んで、うと／＼とする

「貴郎、唯今。」

と言ふ、其處で嬉しさうな顔二つと、事も簡單に
參らぬのは、今日は胃にある蝮の生肝。然も唯た今
の身動きで、下腹から煽り上げて、胸の悪さは、又
夥多しい。

あゝ、用ゐなければ可かつた。夫人も身震して留
めたものを。一ツは然し彼の女のために、同
じくは健全な身體で相愛し、相睦みたさに、人の
勧めに焦つて嘸んだが。

「えゝ、吐了へ！」

仔細はない。「はじめで豁然として悟つたやう
に、大尉は今更ながら心付いた。

が、餘り卑怯なやかひなもあるので、振返つて鐘

撞堂の方、固より其處等に居さうもない六兵衛を見て
定めて、直ぐに反對の方向へ。縁前を眞直について
厠の角から、ぐるりと本堂の裏へ廻つた。大尉は寺
の臺所口を、下水のはけ路、じと／＼とした草の
生を斜めに下りる小川の流を志したのである。

さても心細い事には、流許の傍が、寺の
方丈で、折から和尚は留守で、尼も先刻臺所へ消え
たまゝ寂として音もしない。小縁前に、紫陽花の花
の陰映りをする、淺黄の隈へ涼しさうに、のそりと
寝て居た三ヘルビけ ≪一毛猫の、如何にも胸の透
いたらしい、苦のない形が、昨夜も鼠を、活きなが
ら、あぐりと遣つて、ペろ／＼と舌嘗めづりをした
癖に、と見る目も羨しかつたは何うしたものの歟。

で、流の岸の猫柳の枝の中から、水の上へ、牙
えない顔をぬいと出したが、出すや否や、がツと遣
つた。

出ればこそ。

其の癖、吐くまい、落着けようとすれば、胞衣で
搦んで扱くが如く、ずる／＼と出さうなのが、計

略くこゝに及およぶと、かつかつ空からいきばかりする。唾つばも乾かわいて、蝮まむしの生肝いきぎもは腹はらの壁かべを搔かいて潜くゞるが如ごとしで。

一層倒いつそうさかに成なつて、ありつたけの流ながれを吸すつて、漲みなぎらしても洗あらひたいが、情なさけないのは潮入しほいりで、淀どんよりした水みづの色いろも鹽しほ辛いからで、何なんぼでも合漱うがひも出で来きない。

大尉たいゐは苦くるしさに大粒おほつぶの涙なみだを流ながして、天窓あたまばかり逆さかに掉ふつたが、柳やなぎを分わけて水みづに宿やどつた、蒼白あをじろい顔かほの色いろが、可忌いまはしや、宛然さながら嶽門ごくもん。

向むかうの田圃たんぼの日當ひあたりに、白犬しろいぬが喘あえいで居ゐた。

堪り兼ねて、右手の指を、やがて手首まで突込んで搔廻すと、頭を殺いだやうに耳が寄つて、口も鼻も一所に成つたが、斷つての思ひをするばかりで、此處から生肝は搦出せない。で、目の眩む中にも、大尉は、筍の嫌ひな女が、何かの紛れに一切食べると、さしこみに惱んで、半年の餘ふら／＼して、骨と皮ばかりに成つた最後に吐出した眞蒼な液體の中に、嚙切れもしないで、其の筍が入つて出たと云ふのを思出した。

生命の瀬戸際、もう一息で、

「ぎやツ」

と遣つたが効が見えぬ。がつくり、首を掉つて、ふら／＼して手を外す。ト引裂いたやうに咽喉が痛む。搔破りはしないかと、今突込んだ手を返して見ると、ぬら／＼とした唾が、水搔のやうに指の股へ絡んで、ぼつ／＼赤いのは尚ほ可忍。苦しさに悶えて引釣られた五本の指が一ツ一ツぐびりと曲つて、俗に言ふ皆鎌首。爪が白く目を開いて、ゑみ破れたやうな指の頭が、渦巻いて、ク、ラと笑つた。慄氣

とすると、鉛なまりのやうな掌てのひらの其その重おもさ。潮しほの光ひかりに虚空こくうを掴つかんだ露西亞兵ろしあへいの拳こぶしを其そのまゝ、肖にたとは愚おろかで。

大尉たいゐは突張返つっぱりかへつた片手かたてで、袂たもとから手巾はんけちを引摺出ひきずりだした。が、然さりとては又また此この惡毒臭穢あくどくしうわいむざん無慙なかな中なかに、其そればかりは夫人ふじんの手業てわざに雪ゆきの如ごとく美うつくしいので、大尉たいゐは拭ふくことは為得しえなかつた。凭かくて卵塔場らんたふばに蔭かげが出來でて、鐘樓しゆろうの釣鐘つりがねの中なか仄黒ほのくろう、百日紅ひやくにじゅうこうに夕陽ゆうひが射さして、藪やぶ疊たたみに薄うつつりと何處どこからか煙けむりが搦からんだ時とき大尉たいゐはげんなりした風ふうで、持餘もてあました胸むねを突出つきだし氣味きみに、高たか縁えんに腰こしを懸かけて、頭かうへを垂たれて、病人びやうにんの如ごとく太息といきを吐ついて居ゐた。

彼かれは其それまでに、兎とさま角かうさま、散々さん／＼に悶もたえて焦あせつて、果はては爾しかく疲つかれたのである。

ト言いふものは、先まづ其その胃ゐを翻ひるがへして生肝いきぎもを吐はき出すと言いふ至極簡單しごくかんたんな方法はうはふに失敗しつぱいした彼かれは、獨ひとり自みづから處方しよほうをかへて、濱邊はまべへ夫人ふじんを見舞みまひ旁々かた／＼、散策さんさくして氣きを取紛とりまぎらさうと考かんがへた。

其處そこで小流こながれーこの水みづも生温なまぬるく、白斑しろぶちの件くだんの犬いぬの影かげがぶつくり掌てのひらに映うつつたのも不快ふくわいだつたがー手てを濯すすいで、庭前にはさきへ引返ひつかへすと、直すぐ高縁たかえんに投出なげだしの

海水帽を引被つて、ぱつと日に向いたが、げつそり秒の間に瘦せたかと頬を暗く、杖も持たないで、卵塔場の木戸を出たが

出る時だった、フイと其の、行く前に、と思ふ浮かんで、

「鹿の子斑の蟲這はゞ」…

とうつかり口誦んだ。又此のマダラの音が悪い。

何となく嘔氣く響きで、然も、アノ生肝と云ふのが、紫がゝつて血點々、何うやら斑々とした、と思ふと、咽喉から引摺出して、胸前で悶えた手付も粘つて、血が垂れて斑々 あゝ、それ、ごツと鳴つて込上げる。浪立つ姫に早く逢はう

自分の手廻りに惜いほどのものはないが、浪立つ姫の調度があるから、平時二人とも出拂ふ節は、尼に一言云つて行くのが、今日は其の「ふえへ」を聞く堪らなさに、黙つてつか／＼と境内を。

百日紅の花のほとりに、彼の顔は、蝮の肝に酔つたやう、赤く成つて通つたが、鐘撞堂の棟裏あたりは、ずるりと這つて居さうで頸をすくめた。

やがて黒門を出る、松原、門前の石碑から、睨の爰が果を少し行くー村の學校の運動場を横に、百

姓しやう家を二三軒げん、一寸ちよつとした橋はしがある。此この流ながれが、青あをい雑樹ざふきに包つまれて、圓まるく成なつて、寺てらの裏うらを流ながるゝのである、が、渡果わたりはてるまで何事なにこともなかつた。

ト左ひだりが水田みづたで、右みぎは茅屋かやゝが一一二軒けん、路筋みちすぢから引込ひっこんで、往來端わうらいばたに、蘆あしの葉はが一ひと簇むら茂しげつて、小鯰こなまつぐらゐは釣つれさうな水みづたまり溜溜が一一ヶ所しよある。

此この溜たまりから溢こぼしたか、流ながれから汲くんだか、いづれ小兒等こどもらが棒切ぼうぎれで搔廻かきまわした、其その雫しずくが溢こぼれたほどで、じり／＼と照てり込こんだ、眞白ましろな砂地すなちの上うへに、前後あとさきは乾かわいて、路みちの眞中まんなかへ輪わが一ひとツ、すつと濡ぬれて、一ひとつ巻まいて、薄うすり又またすつと幻まぼろしに消きえた跡あとが見みえた。

時ときに人通ひととほり更さらになし。

フトこれに目めが付ついた。

「何だ、ふん、」
 と自ら嘲つて、大尉は咄嗟、釘づけにされたやうに立淀んだ脚を、引抜くが如く、一間ばかり此方から、故と大跨に、と一歩出る。

其の拍子に、幽に濡れた水の筋が、胴中からむつくりと動いて、ふつと高く成つたと見るや、あゝ惡いぞ。其處らで腹籠を噛んだと思ふ、件の黒い塊が、する／＼と傳つて出て、濡筋の端へ行くと共に、ぼつり縁が切れて鎌首ばかり、むく／＼と蠢いて、草の中へ、忽ち消えたが、音もしないで水田へ落ちた。瞻つて瞳に映る内に、蓋しそれは一疋の小さな蛙であつた事は明かに認められた。が、言ふばかりなく不快な感に打たれて、大尉は件の小沼から瘡病が襲つて来て、背中へ取憑いたやうに慄然として寒氣立つた。

「ちよつり返さう。」が、こんな事で、路を遮られては、又其處へ憑入られう。踏切つて、突抜けて、絡はるものを拂ふに不如。

思切つて、駈出すやうにして、やと一ツ跨いだが、

溝ではないから、足溜りの見當もなくずる／＼と反跳んで飛越す――

同時にヒリ／＼と焼けさうに蹠の熱かつたも道理こそ、ソレ其の拍子に脱いで了つた、餘程顛動したらしい、可なり遠方に、庭から穿いて出た下駄が一足それも丁と揃へたやうに蘆の葉の前にキチンとして、活きたるもの／＼如く鼻緒面を此方へ向けて、おいらは後の草履持で搔踞ふ。

而して、水の跡は、拭つたやうに失せて居た。

「何うかしてる、餘程何うかしてる、何うしたんだ、まあ。」

と素跣足で立つて茫然とした大尉は、心細さうに嘆息して、しばらく其處を動かなかった。

やがて、然も落着いて、居馴れた座敷を歩行く體に、澄まして砂路を取つて返して、ゆる／＼と踵を返しざまに、ちよんと其の下駄に乗つて、今度は悠々と落着拂つて、海の方へ歩行き出したが、餘所目には何うやら辿々しく見えた。

一本路を、それから又、ぢよろ／＼水について、夏樹立の田舎家を通るが、其の何軒目かに大な榎の茂つた門に、軒へ目白籠をかけたのがあつて、豆伊、

豆伊、きり／＼、と可愛く囀る。夫人が同行の時などは、二人で立停つて、覗込んで、目白も馴染なら、此家には、鶏も飼つて、産みたての鶏卵と言ふので、故らに讀める處から、内のものも知合だつた。處で、大尉は自ら我身に、否々、寧ろ、崇を為す。其の生肝に向つて、綽々たる餘裕を示すつもりで、榎の下から差覗いて、トニしたが、其の日に限つて籠が見えぬ。勿論、豆伊豆伊の聲も聞えぬから、

「目白は何うした。」

と聞くと、横土間の框の板に腰を掛けて、圍爐裡も近いのに、掌で煙草をすば／＼と遣つて居た亭主が、顛巻を咽喉へ抜いて、微笑み迎へた。世辭は可いが、其の返事の悪さと言つたら。

「目白は戸棚へ入れました、つい頃日何でがさ、旦那、したゝか長い奴に見込まれたでね。」

「蠅か。」

「と思はず言ふ。」

「否、六尺もあるづら。ふとつこい黄頷蛇でね、其の榎の枝さ、ぐるりと巻いて、宙で胴伸びをして、ちよつきん鎌首を食反らして、軒の籠の中さ狙ふだね、」

大尉たいゐが樹きの下したを摺退すりいた事ことは言いふまでもなからう。
「鍬くわあ掉ふつて追おひこくつて、目白籠めじろかこ、裏口うらぐちへ掛かけ
代かへましけ。屋根傳やねづたひをして、廂ひさしから鴨越ひよどりこえに
攻寄せめよせるだね。はッはッ、無官むかんの大夫危たいふあやうい、と内うちへ
入いれて、はい、此この納戸なんどの眞中まんなかへ繩なわでぶら下さげて置お
きましけな、野良のらから歸かへつて見みると、ひやあ、梁うつぱり
から舌したをべろりだ。彼奴あいつまた見込みこんだが生涯しやうがい、附つけ
狙ねらつて離れはなつここざりましねえさね。」

「殺生するでもねえだけんど、小鳥が可哀相だで、
 卷落して打殺して、旦那様ござらつしやる、あの小
 橋から川へ棄てたが。さあ、又われ好きな處へ來う、
 とお馴染の其の軒前へ目白ツ兒さ出して遣ると、何
 うでがす。

同じ枝から、同じ太さの、同じ長さの同じ鱗な奴
 が、同じ構をして狙ひますが、私もへい、殺した
 蛇さ化けて出たとは思ひましねえけど、話に聞い
 た夫婦で分かる。

二度目に來るは女房の雌だんべい。」

己は雌の肝を、と大尉は思った。

「跡くされなく連立てさで、又、はい、其奴を打
 殺したゞが、念のために、裏の芥棄場へ半日乾し
 たゞ。

夜さり燈つけて見ても、ヒクリともしましねえ。
 婆さまが見ても、嫁を呼ばつても、誰も死切つた、
 と鑑定打つたで、悴が引摺つて行つて、旦那様の前
 でがすがね、大海へさらりと棄てた。

琉球へ流れて行けばつて、最う大丈夫だと思ふと、
何として、埒明きましねえ。

翌日、はい、同じ刻限に又してもへい、同じ長さ
の、同じ太さの、同じ鱗の奴が榎からによるりと出
るだ。これには、ぎよつとしたで、こん畜生、と恐
怖さ紛れに大い聲出したもんだで、とつ様何づら、
と隣から人が來ツけえ。

其の人の言ふにはの、見さつせえ、榎の虚洞はこ
んねえだで、此の樹に住居するちうではねえだが、
此の同じ長さの、同じ太さの、同じ鱗の蛇さ、此處
等、山、野良かけて何百何千何萬と居るか知んねえ。
一度見込んだが最後小鳥を嘗めるまで、後から／＼
とのたり出すだで、死骸さ其のまゝで棄てるでねえ
だよ。骨も皮も黒焼に焼消して了はつせえ、然うせ
ると根絶しだと言ふ。

然うもあるかと、芥溜の傍さ穴を穿つて上下に薪
を積んで、炎天に焰を上げたが、煙さ黒蛇のやうに
のたくり上つて、火先さ舌をへら／＼遣つても、夕
立にもなりましねえ。

えら膏が染みたと見えて、埋んだあととは、それか
ら可恐い蚊柱だけんど、最うそれ切長蟲は來ましね

え。

だけんど、目白ツ子さ三日續き襲はれたで、怖毛立つて、びく／＼して鳴得ましねえだで、戸棚に、はい、落着かせて置きますだ。」

と語つた。

大尉は海へ行くのを止めた。――

彼は来た時とは打つて變つて、足許も定かに勇ましく松輪寺へ引返した。村老の言、我が意を得たり、先刻六兵衛が棄てた蝮の體は、切れた鎌首が腹の子を咬へたまゝ、正に卵塔場の何處かに草枕でのたれて居よう。

可し、搦出して氣の濟むまで、目前で焼亡なほう。我が吐く呼吸さへ、一度外へ出れば行方は知れぬ。

煙も、やがて、松風も吹いて散らせば、晩の麥酒は清々しく飲めるであらう。

何故疾くにも氣が付かなんだ、と口惜いまでに氣も漫ろ。

で門の前の松原を潛る時も、焼くに然るべき枝振を、とニして、餘り大業なのに獨りで微笑んだくらみであつたが。さて、然う首尾よく行かぬのは、蝮の崇歟。生憎なもので、突然卵塔場を、唯見ると

人が居る。

早や其處だけは秋になつたやうな垣根の草が日に
蔭つて、葉末を樹の枝へかけて細く濃な煙の立
つのは、新しい線香らしい。鐘撞堂の邊りまでは、
まだ其の匂も渡らず。今詣でたばかりと見えて直ぐ
には歸りさうな様子もない。――寺に附属の埋葬地
は広い場所が別にあつて、門内の其の井戸の傍
のは、十坪餘よりはないのであるから、其處へ割込
んで、蝮は探せぬ。

「ちよツ、」

と舌打して木口からそれた。つい此の六日ばかり
前の新佛の家族らしいが、村でも大分の舊家、由緒
ある家で、大祖先の塚さへある。其の為に、特に此
處へ葬つた由、和尚の話。亡くなつたのは女房で、
産後で嬰兒も共にと聞いて、夕越の二日月に、夫婦
で縁から回向したものだつたに。

大尉は同じ縁に腰を落して、其時、可哀がつた小
兒どもゝ煩い。それ、黒い天窗が一つ草の中をちよ
こ／＼歩行く。

夫人が同伴者に手を曳かれて、蹠跟と片折戸を入つて来た。

卵塔場は、と云ふと、線香の煙が次第に濃かに成つて、樹の間に夕暮の色を籠めた。草の中に、黒い天窓が、一ツ殖え、二ツ殖え、やがて四ツ五ツに數を増して、手鞠が傳ふやうに行つたり來たり、二三人小兒まじりに一家族が墓參と見えて、なか／＼歸りさうな氣色もないので、氣が抜けた大尉は、千斤の磐石を胸へ掛けて、づしりと一ツ重量をくれた體、首から腰へ突張を入れて、ぐたりとして俯向いて居た處。――

手を曳いたのは、場所は違ふが同一土地に、別莊のある少佐某氏の夫人で、上官ではあるが、郷里を同一とする大尉とは、主人同士が別懇なれば、女同士は尚ほ親しい、其の人であつた。

凭懸り合つた、袂も、裾も、搦みついて咲分けた朝顔見るやう、浴衣の色こそ涼しいが、大尉の夫人は葉を垂れてしぼんだ風情。

譬へば耳許白く、頬の色が颯と褪せて、唇も

白澄んだ、片手に二人の海水帽を一ツに累ねて、ぶらりと力なく紐を下げた——此の方が瘦ぎすで、唯較べても弱々しいのに、しを／＼と同伴の花やかなのに凭りかゝつて、手を曳かれた肩を落して、長い襟脚たよ／＼と、俯向き氣味の、鼻筋の通つたのに、べつたりと鬢が亂れ、膨りもあるべき前髪が、斜にひしやげて眉を隠し、束ねた頭はがつくりと摺落ちて、支ふる簪もなく重さうであつた。

「唯今。」

唯、同伴の方が、其處に端居した大尉を見るなり、平時の快活な調子で聲を懸けた。此の人の手にくしよ濡の、白と朱鷺色の海水着が二人分、兩端がづぶりと下つて、眞中を結へた手拭からも雫が垂りさう。

と見ると、夫人も大尉を見た。が、同時に著しく美しい眉を顰めた。蓋し心に澄まぬ事があつて、其が目のはりに露れたのでもなく、大尉に對して不快を感じたのでも無論ない。仔細は立處に分つたが、要するに、途中人目を包ましよう押堪へて居た身體の悩みが、遠慮なく眉宇に出たので、夫人は無言の裡に、早や深切な夫に甘えたのであつた。

「貴下、大變よ。」

と同伴者は同く、快活な調子で云つた。大

尉が造りつけた體で動かないから、二人は其の前に立停まつたまゝで、

「一寸、奥さんは死にかけてよ。」

寐めるやうに、前髪を掉つて睨む。

「死にかけ」

と重々しく言ひかけて、大尉は目ばかり慌し

い。「さう、然うよ、死にかけたわ。眞偶に。江崎さ

ん、貴下、泳を知らない方を一人ぼつち海へ超越す

なんて亂暴よ！ お氣を着けなさいよ、眞個よ、大

事な奥さんを何うするつもり。」

と二人の顔を見較べながら、早口に饞舌つて、微

笑して、又大尉を睨んだ。

時に、言ふ處に因ると、夫人は浪に捲倒されたと

の事である。

唯倒れたばかりなら怪しうはないが、皆無水心が

ないので、ハツと動じて驚くと、最う氣が遠く成つ

て、腰よりは深くない渚ながら、手を支いて起上る

方角もなく肩も髪も波に沈んで。

「それに、又危またあぶないつたつて、」

今日けふあたり漸やっとなだらかに凪なぎたけれども、まだ何どうやら此この中ちゆうの土用波どようなみの餘波なごりらしい、胸むね越こすばかりなのが時々とき大敵おほつねりを打うつて寄よせる。丁ちやうど又また倒たふれた處ところへ、二ふたツ三みツ續つゞけざまに引被ひつかぶせたー

「私わたしは直ぢき附くっ着ついて居ゐただけれど、」 と同伴どうはん者しやは念ねんを入いれるが如ごとく自みづから頷うなづいて、極きわめて眞面まじめ目めに且かつ老實らうじつに附つけ加くはへた。

「ひよつと見みる。と奥おくさんの姿すがたがないんでせう。

一寸ちよいと、おやと思おもつたわ。私わたし、」

と驚おどいた風ふうを仕方しかたで見みせうと、はじめて手てを離はなして、思おもひ入れで胸むねを叩たたくと、支さへ竹たけをはづれたやうに夫人ふじんは扱し帯こきした半身はんしんを崩くずして、俯うつむ向むいて密そつと胸むねを撫なでる。大尉たいゑもげつと言いつて狼狙ろうそへて胸むねへ、握拳にぎこぶし。

「まあ！」

直き足許の處に海水帽が見えるでせう。其の何ですよ。反返つた麥藁の縁へ、眞白な潮がざあ／＼ざあ、ほら、一つは其の重さで以て、奥さんは起られなかつたのね。と云ふものですがね

まさかとは思つたけれど、一寸覗いたら驚いたわ。其の浪の中に眞蒼な奥さんが居るぢやありませんか。吃驚して、突然腕の處を掴まへて起さうとするけれど、潮がかゝつて、貴下、頭が重くつて何うにも動かないんだわ。御覽なさいな、奥さんは起

ない筈よ。一寸

「大變よう、誰か来て！」

ツて怒鳴つたもんだから、近所に居たのが、二三人ざぶ／＼躍つて来る。沖の方から抜き手を切つて歸つたのもあつてさ、いきなり引起して、まあね、私の許の海水小屋へ抱込んだんです。――漸とまあ助かつたわ。

すぐに、海水着を脱がして、浴衣を、それだつても大勢人だからがするんですもの。可鹽梅に來合せ

たお隣りの別荘の、あの顎髯の生えた書生さんが、背後むきに小屋の前へ立つて、こんな大きな握拳を拵へて、

「蹴殺すぞ！ 覗くと、こらつ！」

てんで追散らかしたわ。

まあね、それから静かに熱い砂の上に寝かして置いたの、大分水を飲みなすつた。然うでせうつて、えゝ、

と顰んで獨りで合點み、

「でも、そんなにはお吐きなさらないのですもの。

途々もお腹が、がば／＼云つて、胸が苦しいつて、

些とづゝ水を反吐すんだわ。」

聞く内に、大尉は自分幾度か、口許まで、がつと

来る。ために應答へもせず澁り返つた。

同伴者は頓着なしで、「其の書生はじめ、助け

出した人たちも、途中を案じて送つて来るつて言つ

たんですけれど、往來のものが目をつけると極りが

悪いからつて斷つて、私だけで送つて來たわ。そら、

大した事はないけれど、何しろ吃驚したでせう。大

變に氣を打つて、口もよくは利かないんだもの。そ

れに、御妊娠ですからね、ほゝゝ、お大事になさい

まし。私は、足はこんなだし、それにね、晩方に旦那のお友達が来るツて、何ね、構はない方だけれど、又お酒でせう。其の支度もしなければならず、最うそちこち来て居るかも知れないの。

勿論ね、歸るとすぐに、近いから下女を遣つて、お醫師を然う云つて寄越しますからね、診てお貰ひなさいまし。奥さん、

と夫人に向つて、

「海水着は、持つて歸るわ。一所に濯ぎ出させて乾かしてから届けますよ。ね、」

と言ひかけて、未だ其處に悄然と立つた夫人の姿に、はじめて氣が付いたやうに慌しく、

「一寸。まあ、縁へでもおかけなさいよ。江崎さんに掴つてさ。こんな時の夫ぢやありませんか。眞個に、氣拔がしたやうに茫乎して在らつしやるわ。でもね、御無理はない事よ、驚いたでせうツて。」

「難有う存じます。」

と、たゆげに深く頭を下げ徐々と二足ばかり、漸と今、其も弱々と手を伸して、濡れた帽子を投据うるが如く、ぐしやりと縁へー熟と大尉の顔を視

めて、

「貴郎、よくお禮を仰有つて下さいな。私ほんたうに死ぬ處でした。」

些と怨めしさうに言つたのは、不思議なくらゐ。

大尉の黙然で澁つて居るのを、同伴者に對して氣が揉めた所為である。

ハツと突立つた、大尉の未だものを言はぬに、

「何ですね、お禮なんて、奥さんの飛だ御災難を助けさして頂いて、私こそお禮を言ひたいわ！眞個

よ。もしもの事があつたら何うしませう、」

と聲を絲のやうに震はせた。

「私が傍について居ながら、其こそ申譯がないぢやありませんか。奥さんは内氣で華奢で在らつして、海水なんてお轉婆なことはお好きでないのを、無理に私が誘ふんですもの！」

江崎さんのお色が白いから、やつかんで、き様の夥間入をさせるんだ、なんて夫で言ふわ。ほゝほゝ。ぢや失禮しますよ。醫師を寄越しますがね、お大事になさいませよ。まあ、桔梗がしをらしく咲いたこと、御覽なさいな、奥さんが立つてるやうだ

わ。

同伴者が歸ると、夫人は重さうな頭を下げて、兩方の腕を白く、黒髪に掛けて懶げに一つ、ぐらりと揺つた。

「おい、寝んのかい、早く、此方へ上つて、」
 と大尉は矢張り苦り切つて、胸のむかつくのを押堪へた。是が不斷、胃袋に生肝のない時だつたら慙の場合である。――其のまゝ、飛び着いて、弱腰を抱いて、書院へ躍込んでも罰は當らぬ。が、大きく動いても嘔げさうで遣切れなく、卵塔場の墓參者は、嬢の死骸を探すにも、夫人を抱上げるにも、旁々兩方で、妨げられて、一向冴えず、

「喃、」と生暖く促した。

「えゝ、」

と夫人も滅入つて言つて、頭を壓へた手を、こちらして、細い頸を上へ搔く。

「何うした。」

と言ふと又可厭なニ。ごつくり飲んで、

「うゝむ、き様。」

「えゝ、急にキヤノゝと胸が痛みましてね、あの、

お腹で、びいく、びいく、動くやうな気がしたもんですから、」

「ウ、腹で、びいく、びいく、」

忽ち口に蟲唾が溜る。ちゆうと、辛うじて咽喉へ送つて、

「小兒か。」

「は、そんな気がしたもんですから。あら、冷えたのぢやなからうか、腰まで水の中へ入つて小兒に障つたか知ら、とヒヤリとした處を、浪が來て巻いたんですもの。海水帽へ瀧のやうに突かゝつて、私苦しくつて、脱がう／＼としたんですけれど、結んだ紐が、髪と一所に絡みついて、」

と鬢を撫で／＼、引入れられさうに言つた。

「鹽水をどつさり呑んで、貴郎をー呼ぶと、口へも鼻へも焼火箸のやうに水が入るんですもの。かつとする、最う氣が遠くなりましたよ。でもあの、」

「

と莞爾した、夫の目に、其の得も言はれぬ美しさ。

「誰か抱起してくれたのを、餘所の人だとは思は

なかつたの。貴郎だ、ーと思つて、しつ

かり抱着一いて、あとで恥かしい思ひをしたんです。」

あゝ、生肝を嚙むのではなかつた。

「立、立つてちや不可ん、まあ、横になれ、よ、疾く。」

「えゝ、ですけども、私髪が洗ひたい。」

「髪が洗ひたい。」と大尉はつい鸚鵡を遣つた。

「潮水でびつしよりで、堪らない、可厭ですも

の。」

「き様、不斷でさへ髪を洗ふと、ぼつとして逆上せるではないか。そんなに疲勞してる處を、何だ！

まあ、止せ、そんな事は何時でも可い。」

「ですけど、私も然う思ひますけれど、粘々して、

ほら、こんなよ。」

で又ぐら／＼と揺つたが、べつとりして左右で捌けた。最う元結を弾いて居たから。

「そりや酷く粘々しますよ。」

大尉は最惜しさ堪へ難く、

「構はんさ。」

身悶を靜とする。

「でもね、私聞いたことがあるんです。私の國のね、何とか村つて言ふのには、一人づゝ髪の長い

女をんなが生うまれるんですつて。其その女をんなは髪かみが長ながくつて、
艶つやがあつて、光ひかるほど綺きれい麗れいなかはりに、どんなに、
洗あらつても擦こすつても、扱しこくほど粘ねば々／＼する。其それがね、代だい々／＼
蛇ぢやの子孫しそんだつて言いふ話はなしがあるんですもの。」

「馬ば鹿かな事ことを、」

と聲こゑ高たかに叱しかりつけて、颯さつと顔かほの色いろをかへた。

「愚ぐ圖づ々／＼してると引摺ひきずり込こむぞツ。」

が、夫人ふじんの驚おどろく隙ひまもあらせず、大尉たいゐはぎよつとす
るまで、其その無む法はふだつたのに心こころ着ついて、辛からうじて笑あは
顔ほを造つくつて、

「かち／＼山やまの嘶はなし處ところか。嬰あかんぼ兒ごだな、まるでき様さま

は。」

けれど、今いまの劍幕けんまくで、夫人ふじんは兎とも角かくも思おもひ留とまつて、
「では絞しぼるだけ絞しぼりますわ、まだ雫しじが垂たりますか

ら。」

と髪かみを扱しこくのに、弱腰よわこしをすらりと極きめ直なす。

丁ど爾時、袖が寄添った扱帯のあたりで、桔梗の莖が、偶然煮湯でも灌いだやうに、ぐしゃ／＼と萎え凋んで、葉を絞つて、ぐつたりと成る。

ト根に散亂れた茶碗の缺片に、ちらりと映つた鱗のやうな青い影。

其が又ほんのり染まつて、白さも凄いまで、頸を其處へ。片手で握 餘る鬘を握つて、扱いて解いて倒にすらりと落すと、腰を屈めて前へ俯向いた夫人の丈では、長さを宙へは釣り切れないで、ずらりと飛石へ落ちる處を、我が腕でも掬つて投げたし、千條の柳も心あつて、泥に塗れまいと毛捌きをしたらしく、髪の毛の末は艶々と緑 流れて、高い縁へ、颯とかゝつた。見事に丈にも餘るのである。

實に實に、美しき此の夫人、其の黒髪に於て最も美しく、美しい黒髪は、其長さに於て最も美しいのであつた。

言ふまでもなく癖のない素直なのであるが、上手な髪結も餘り其の濃かなので扱ひ兼ねる 一寸束髪で通つても、路行く者の振向いて見るばかり緑

の影が房りする。

時に襟脚から、ふつくりと、髻を手で一扱き、
一つ下つて、すらりと長く、今其の縁にかゝつた處
に、先刻親仁が差置いた、蝮裂の小刀がギロリと光
つて、毛筋を縫つて潜らうとした。

大尉は何故ともなく、**■**呀と一目、ひよい、と手
に取り除けたが、ト恚う突刺すべき構のまゝ、ぶる
／＼と震へが起つて、柄が附着いて手を外れず、腕
が鍵形に突張返つて、思はず、

「あつ、」と溜思する。

「ふえへ」

の笑が、大尉の頭から、ふはりと被つて、尼の姿
が湧いたやうに忽然として其處へ出た。

が、兎角うの間もなく、黄色にむくんだ膝で、腰
布をふはりと支いて、兩手で、縁の髪かみの尖さきをぐい、
と壓へる。

響が微妙に八尺の絲を幽に傳つて、夫人はものに
襲はれたやうに、毛穴から慄然としたらう。髪を倒
にしたまゝ、顔を上げようとすると、引釣られた状
に又がつくりと成つた。が、紛べくもない尼である
から、其まゝ絶入りはしなかつた。

「こら、」

と異變な聲して、小刀持った手がはじめて動いたが、ぐる／＼と空へ廻す。あゝ、あゝ、危い。こののは中空の怪しいものに、蝮の肝を餌にして釣り上げられたも同然であるから。

其の赫とした烈い顔を、瞼をぶる／＼と上目づかひで、

「ふえへ。」

と例のあだ生白い笑を放つて、腋の下から、ぐつちより黄ばんだ、蒼黒い、鬱金の切の汗拭を出してべた／＼と夫人の髪を壓して、

「最愛や、可惜毛を。可惜毛、」

と揉んで拭く時、一艶垂々と千條に湧いて、夫人が握つた髻からも、さら／＼と水が落ちた。

尼が膝敷く縁も濡れた。

「艶が流れるえの。ふえへ。」

と莞つて、

「ても美しい、よい髪でござるえの。可い髪ぢや

の。長い、長い、長い、長い、長い、」

と尻上りに言つた聲とゝもに、其の身も其のまゝ、虚空へ飛んで上りさうな氣勢がする。

昏時。^{がれどき}
本堂の暗さよ。^{ほんだうくら}
鐘も撞木も夜に架つて、^{かねしゆもくよる}
庭前の黄^{にはさき たそ}

「お尼様、お尼様。」と呼ぶ皺枯れ聲。本堂前の高縁の階を、四五段上つた處に、影のやうな人が眞正面を向いて立つた。：

別なものではない。墓詣に來て卵塔場に居た黒い頭が、胴に繁り、太い蝮を半分に切つた形、いづれも鎌首を眞直にした體で、ぞろ／＼と五つばかり。

今其の出口の片折戸から、其處等へ籠め來る逢魔が時の陰氣の動揺に漾ふ状に、ふら／＼と出て行つた。其の中の一人誰かゞ、用あつて尼を呼んだので。――固より彼等は、木戸を出際に、つい目の前に、尼の踞つた姿は認めたのであらうけれども、大尉の住居内なれば、と地下のものゝ遠慮から、故らに其方を立廻つたに相違はない。

と黄色い膝も、蒼黒い汗拭も、縁に波打つ夫人の其の黒髪のを、フイと消えて、暗い處で、

「ふえへ、」

と笑つたが、本堂の板敷に、みし／＼と幽な跽音。
「南無阿彌陀佛。」

と押被せて、件の男と、何か其處で喋舌り出す。――蝮割の小刀は、無事に何事もなく、バタリと大尉の手を離れて落ちた。

けれども誰が然う為せると云ふでもなしに、大尉は再び此の小刀を人知れず手にするやうな事に成つた――然も其は、夜更けて、人々が寝鎮まつてからである。――言ふまでもないが、同一日が暮れての事で。――

大尉は蚊帳を齊うして、夫人と枕を並べて、先づ寝た。

寝たとは言ふが、唯疲れ果てた身體を、疊の上へ横へたに過ぎぬ。其の疲れ方と云ふものは。

蚊帳も然うで。

「貴郎、濟みませんが蚊帳を釣つて下さいまし

な。

と座敷の片隅から、白百合の花が、蜘蛛の巣に惱んだやうな風情で、夫人が細い聲して言つたので、はじめて氣が付いて、蹠踵と沓脱から立つて入つて、殺生禁斷の浦へ網を打つやうな工合に蚊帳を釣つたが、最う其の時から、然う言つた疲れ方。

可哀や、夫人は潮垂れ髪を、蟲に弄られて居たのであつた。自分では團扇で拂ふほどの元氣もなく、これも疲れて、たよ／＼と寢床に倒れた。

醫者の注意は、腰、腹の冷えないやう、褥を重ねて暖く、と言ふ。奮の曆で、盆近い今日此の頃、暖いも暑いもありはしないが、冷える冷えぬは別段。殊に、醫者が來て診た時には、晩方の熱が出て、夫人は惡寒して、ふる／＼と震へて居た。髪を絞つて、縁へ上るのに、一度手を支いて、はつと息をして、それから漸々、浴衣で包んだ片膝を上へ、裾を足掻いて入つた位。

直ぐに醫者が來たのであつたが、寺は、黒門の敷居が、腐蝕んでも朽ちても高いから、お抱へ車は引込めぬ。膝掛を肩に、革鞆を提げて、車夫が供して、國手は洋服で扇子使ひをしながら。一丁と案内は少佐の別荘の方から傳へたと見えて、鐘撞堂を見上げもせず、ひよい／＼と靴を浮かせて、片折戸から、づゝと入つて來たものだつた。

處で大尉は、其の氣分、夫人は言ふまでもなく病人なり、診察は、美濃と近江の國境、寢覺の里と言つたやうな、縁と座敷の敷居の際で。

これが濟すんでも金盃かなたらひに手拭てぬぐひと言いふ式しきもなければ、
初手しよてから座蒲團ざぶとん、お茶ちやなどの手當てあて勿論もちろんなし。

何なんでも醫いは仁術じんじゆつなり、と極きめて掛かつたやうな扱あつかひ。
醫いも亦また仁術じんじゆつと差心得さしこころえて、容體ようたいの説明せつめい、養生やうじやうの注意ちういを
疊たぐみ掛かけると、大尉たいゐが、

「はあ、」

夫人ふじんが、

「は、」

其の時分、臺所で、かた／＼、方丈を、ざらり、
 續いて板敷をばた／＼で、尼が本堂の鐘の傍の金網
 張の常燈明に御明を點して、

「南無阿彌陀。」

ずるりと廻つて、

「南無阿彌陀。」

で、御本尊の前へ、御蛸を、

「南無阿彌陀。」

御前立ちに灯を點げ／＼、

「南無阿彌陀、南無阿彌陀。」

やがて臺所へ、かたんと下りた。――いや、御念
 佛も恚うなると惨目なもので、煤取杵取ヤレ忙しや
 と些とも違はぬ。

――唯、以前の墓參者と入替つて、此の容子を、
 肩に膝掛けして車夫が階に立つて視めながら、揉足
 で藪蚊を拂く。

此方では國手が、何を言つても、『はあ』と『は
 で、一向冴えないところから、合點の行くやうに細々
 と喋舌らねばならぬ。乃で喋舌る。喋舌るが、手應

へのないため、最う一息、最う一息で、

「お手がありませんですな、薬を取りにお寄越しになるのに。あゝ、お使者を下すつた御知合

のあの御別荘の女中でもお遣はし

大尉は依然として、

「はあ、」

夫人も同じく、

「は、」

と言ふ、一何うやら未だ是だけでは腑に落ちず物足りない、で立場が悪いが、はずみ懸つて、つい深入して、

「ト云つても、彼家までも御使ひがないやうに見受けします。宜しい、車夫に持たせて、

私から差上げませう、然うなさい。」

一ツ判然と申された。

「まあ、國手、」

と夫人の調子が活々と成つたを機會に、すつと立つて、突立つて、大に國手振を發揮なされて、

「銀藏！」

「へいッ」

向うから車夫が、横走りの小刻。跳んで来て、鷹

揚に無言に差出さるゝ革靴を攫ふやうに引取つて、
すた／＼門前へ突走つた。

國手が靴を穿かるゝ頃には、最う楫棒を壓へて待
たう。

國手はずん／＼出て行かれたが、餘り御機嫌の體
ではなかつた。

處が、何と思つたか、ふいと立つて、大尉が其の
後へついて、出掛けて、丁度、國手が車に乗つて、
楫棒を上げた處へ、潛門から、松原へ、其の蒼白い
眦の上つた凄しい顔をひよいと出す。はつと國手は
帽を脱つて、

「やあ、お見送りで、これは 恐 縮 。

とはじめて、其の體面を保つた風に、悠々と扇子
使ひをされたが、車は矢の如く走り出す。忽ち小橋
をがらがら／＼。

が、大尉は慇懃に、國手を門に禮したのではなく、
實は、彼が夫人を診して、やがて、藥の効を説いて、
頓服して胸が開き、再用して惡寒が去り、三服にし
て小用を通じ、忽ち安眠することを得て則ち治す、
と恰も 掌 を指すが如き頼母しさ！

自分盗んでも服用したく、追つて夫人の清々しく

成るのが、目に見えるやうな羨しさに、手を出して
脈を診せて、胸の苦悶を語りたかつたが、しかし平
時は兎もあれ、疲労し、發熱し、戦慄する夫人の前
では、怪我にも打明けられる臍物ではない。

處で、歸り際を途中で留めて、兎も角もと、とつ
おいつで、つい應答も上の空で居たが、いざ、と成
ると國手些と奮然の體で、ツン／＼と去られたので、
夫人の手前、駈出しも追ひもならず、漸と門の
顔を合すと、餘り早合點の挨拶に、フト出後れて車
を逸した。

「あゝ、」

と其の途端に失望の歎息を洩らすと、芬と、臭つ
て、ウイと又ニが出る、其の氣持！

「うゝむ、」
 と自棄ばちのやうな力のない呻吟聲で、大尉は俯
 向きざまに、頸窩をドンと其の門の扉に當てゝ、
 邪険にニツ三ツ引擦つた。兵兒帯もだらしなく足が
 抜れる。

開けた胸を搔合すも億劫で、億劫ばかりか、此處
 へ手でも觸らうものなら、忽ち件の生肝が、ぴくり
 と指の尖へ觸れさうで、生暖い息が發奮む。

頭も、一つは冷氣を感じたいのが目的で、扉に附
 着けたものだつたが、觸つて見ると、照込んだ餘炎
 が未だ松の露にも冷えないで、むつとする、不快な
 枕。

肩で乗上つて、ふら／＼後腦で釘隠しの鐵の金物
 を探したけれども、一寸は見當らぬ。のみならず、
 足を然う振り掛けて、頭が扉を蠢めく工合が、何か
 長いものゝ畝り上るやうで、我ながら思はず慄氣と
 した。

斜向の鐘撞堂が、夕暮に薄黒い。
 釣鐘を抱いたら嘸、と此方から手を出すまで、一

縷涼しさの綱を手繰った。

雖然、其も束の間で、つい其の引片傾いだ屋根裏を籠めて、黒くむら／＼と隈立つて、ひらひらと筋の赤い百日紅が炎のやうに絡むのを見ると、額がほてつて赫と成る、剩へ青竹に蝮を巻いて、其處へ六兵衛が立顯はれた發端を惟出すと、半日の出來事が、腹を波立たせて、胸を引掻く、むく／＼と肝が響く。

「げつ！」

と呼んだ。

瞬間、大空の星に離れて來たやうに、光もなく、音もなく、づんと大きく目前に架つた釣鐘の形が巨大なる蝮の鎌首と成つて釣下つた。見る内に、鳴らぬ響が傳つて、執念の唸り聲が、ぶんと大尉の頭腦を打つ。

彼は此の時から、岑々と頭痛がし出したのである。

「不可ん、此は不可んぞ！」

と呟き／＼、兩方の耳を平手で、壓し壓し、脚早に引返す。

忘れはしないが、猛然として思ひ浮ぶ。夫人は、

と見ると、其の時、床の間の傍の押入れから、一枚夜具を出したのを、裾とゝもに爪尖に引摺つて、尚ほ暗い中へ、手を二の腕まで突込みながら俯向いて居た處。

「寝るのか、出して遣る。」

と大尉も蹠跟けながら、急いで寄つた。

「濟みませんです、動くと嘔吐しさうで、」

「うゝ、」

と苦り切つたが、しかし深切に引摺出して、蒲團を擴げた。隅つこでは暑かりさうな折ながら、大尉も其處までは行届かず。夫人とても大儀な餘り、座敷の風通しまでは持出せない。出た處勝負で寝ようと云ふ氣、尤も壁あり襖あるは、病を守る後、楯ともなるかして。

で、引落した有文を一つに襲ねて、敷蒲團をふつくりと高くして、

「寝ろよ。おい、」

夫人は其の間も、枕頭に、胸に手を入れて目を瞑つて居た。

「貴下の夜具は？」

「一所に敷いた。何、己は構はん。」

「だつて、貴下、」

「醫師が暖くして寝ろつてつた、愚圖々々言はんで！」

何だ。」

と直ぐに荒く成る。何故か、癩癩の仔細は知らず、其の仔細を兎や角の元氣もなしに、夫人は床上に摺上つたが、枕が無い。

裾の方、机の、前ともなく横ともない、中ぶらりな處に、大尉が中腰で黙然たりで。——何だか附穂のない様子が、枕を取つて、とも言はれないし、又言はせさうにもなし、自分起直るは懶し。

で、夫人は敷蒲團の一枚を、端を巻いて頸にかつた。が僥倖重い頭には、括り枕の假の寝心。

蚊帳を釣つた時、夫人は、しかし夫の夕餉の心配をした。

「構はん！」

病人が何だ、そんな事。」

と又突匆ねて、我と其の突慳貪なのに驚いたが、今は最う優しく言ひ直すのも氣不精に成つて居た。

：

こんな態度を、夫人が何と誤解しようと、後で辯解けば立處に分る。此の持餘した胸の始末さへ着けば、何でもない、なか／＼そんな事に構へるものか。

大尉は、むつと面を打つ、蚊帳の香を飛退くが如くに避けて、ざつぶり浴びた泥水から、ハツと顔を出すばかり、夜氣の涼しさを慕つて、其まゝ又縁へ出た。

いしくも、月夜！と視めたが、其の月は丁ど出汐！で、卵塔場の樹立へ、葉を潜つて、枝を傳つて、黄色い蛇のやうな光を疊み掛けて、さや／＼とした姿は見せぬ、餘り其の高くもない梢に透いて、

葉蔭はかげの累かさなる門もんぐわい 外まつばらの松原まつばらは、薄うすりと青あをみ渡わたつて、ばつと水田みずたへ掛かけ、藪やぶへ渡わたつて、微ほのじろ白しろく、川筋かわすぢが通とほると見みえて、一際ひときわすつと明あかるい處ところもある。

飛石とびいしも、月つきの色いろで、浅あさい海うみの底そこの岩いわ見みるやう。此この影かげは觸さわらぬか、蝮まむしの毒氣どくきか、萎なえて倒たふれた炎天えんでんの一本ひともとの桔梗きくやうが、生々なま／＼しい鉋かんなくづ屑くずのやうにのたれたのが不氣味ふきみなため、涼涼すずしい露つゆも辿たどられず可怪あやしや、其處そこへ棄すてた軀むくろから、黒くろい粉こなでも吐はきかけて居あさうな、卵塔場らんたふばの、其その月つきの影かげ。

熟ちつと瞻みつめて居あると、目めが澁しぶい。澁しぶいと言いつて、眼め球だまを毛けで繫つないで頸ぼんのくぼ窩ほへ引ひ緊きしめるやう、毛穴けあなが、びり／＼と戦をのきかゝつて、耳みみの底そこへ、何い時つ聞きいた聲こゑやら、鐘かねの音おとが、ぐわんと響ひびく。此この響ひびきは、奥おくの底そこのドン詰づまりで、蝮まむしの肝きもの唸うなるのが傳つたはつて、びり／＼と五體たいへ來くる 其そのために目めが澁しぶい。

澁しぶい目めで月つきを見みると、卵塔場らんたふばの影かげは、黄きいろ色いろい蛇へびのやうに成なるのであらう。

呀や！ 或あるひは蝮まむし其そのものが、自じ分ぶんでも物ものを見みる色いろは、萬象ばんしやう 凡すべて黄きであらうも知しれぬ。恰あも尼にの膚はだの如ごとく

くーはてな。

…。

狙つて躊躇して居たのである。

雨戸も障子も、未だ開放しの宵の内、臺所にも、
方丈にも、月と同じやうな灯が射して、兩方の
あかりが隠れ場所もなく、微ながら何處へも届く。
此方が月に動けば、尼も灯で動きさうで、聊の
隙間も見當らず、殊に次第に伸び且つ擴がる樹の枝
の黄色な影を、最も静として見るには忍びなくなつ
た。

「えゝ、寝るとせい。」

怖然として立揚ると、ぐしやりと来て、生暖
く足に掛つた物體がある。大尉は総毛立つたが、其
は夫人の手から棄てられた、未だ乾き果てぬ海水帽。

と見定めはしたけれども、震する紐に、どんより
と月が射して、潮の鱗がのろゝとした細長い燐火
と成つて、跽音にずたりと懸つた。

蚊帳かやの中なかでも、大尉たいゑの目めは黄色きいろく光ひかりつた。

元來ぐわんらい、手觸てきはり足觸あしざはり、其處そこ等らのものが、兎ともする
と、蝮まむしのやうに見みえるから、此蚊帳このかやへ入はいるのも、ふ
はと口くちを開あけて、長ながい腹はらの中なかへ吞のまれるやうで可厭い
だつた。

が假令たとひ蝮まむしの腹はらにしる、最惜いとしい夫人ふじんが寝ねて居ゐて見みれ
ば、是こればかりは流石さすがに猶豫いうよも躊躇ちうちよも出で来きない。がば
と潜もくりこ込んで黙だまつて仰あをむ向けに寝ねた。枕まくらもしないで、頭あたま
を抱かへて、今いま悪いものを踏ふんだ片足かたあしは、膚はだにつくの
も不快ふくわいであるから、股またから開ひらいて、毛布けつとの外そとへ投なげ
て置おく。ーそれでも、やがて寝ねるつもりで、毛布けつと
は一枚まいだけ自じ分ぶんの臥床ふしどに先刻さつきからのけてあつた。

恚こう枕まくらを竝ならべても、肩かたよりふつくり高たかい處ところに、仰あを
向けに寝ねた夫人ふじんの唇くちびるから聲こゑが出でぬから、稍やゝあつ
て、むず／＼と額ひたいを上げあげて覗うかがふと、すや／＼と眠ねむつ
て居ゐる。

枕まくら許もとに盆ぼんがあつて、散藥さんやくの袋ふくろと茶碗ちやわんが一個ひとつ、藥くすり
の瓶びん。はゝあ、扱さては使者つかひで届とけたのを、尼にが取とり次つ
いで持もつて來きて、最もう一度ど振ぶりは服用ふくようしたらう。つい目め

の前の縁端に出て居ながら、何かに氣を取られて知らずに過ぎした。此れだから言はぬ事ではない。自分の見ぬ間も、尼はくる／＼と立廻る。

待て、最う些と、と大尉は卵塔場の死體搜索の機會を掴み寄せるまで心を取られ、一つは恚る際、小取廻しの仕事なぞ思ひも寄らず、面倒ながら、洋燈も點けないで、敷居越の常燈明を蚊帳越に便つたが、其の灯の色も又黄色い。而して、最う其へは蛾が来て、ばさり、トン、ばさりと當る。

當る毎に、二と翅から黄色い粉を散らすやうに思はれる。と其の粉が、ふつと来て、粉薬の袋へ飛込んで、劇い毒に成りさうな氣がして成らぬ。

で、夫人に過失あらせじ、と憂慮つて、密と盆から取つて、毛布の下へ入れようとして、餘り其の仕業の變なのに心付いて、元のまゝ差置いたが袋の色も黄色く見えた。中の粉も何故か黄色からう、と思ふと、透かして覗けば、罌の薬の水も黄也。

ぐい、と大尉は澁い目を引擦つた。此の又目の澁いのは何うしてだらう。いや、目ばかりでない、耳の穴も澁く、鼻の中も澁く、唇から舌の根、咽喉へ下つて、胃の中にも澁さが凝固る。かう澁いの

は蝮まむしの不斷ふだんの氣持きもちかも知れぬ。腹はら一面めん蝮まむしの薄皮うすかは
で張り詰はめたやうで、其その上うへ、澁しぶさで、ぐん／＼こ
めかみから頸ぼんのくぼ窩ほをかけて引ひ緊きしめられる工く合あひが、段々だん／＼、
腦天なうてんが縮ちぢまつて、尖とがつて、平ひらく成なつて、這奴こやつが鎌首かまくび
に化ばけ懸かける。あれ／＼、眦まなじりも釣つつて、眉毛まゆげが
きり／＼と耳みみに附くつ着く。

と悶もたえて溢はみだした、疊たぐみの目めの膚はだ觸さはりが、ざら／＼
と逆立さかたつ鱗うろこで、毛穴けあなへ喰く込ひこんで、むくと擡もたげて、一
ツのつしと、のた打うつて、ぬいと伸のびる。

大尉たいゐは腹這はぢひに成なつて居ゐたので。

「わ！」

と叫さけんで匆はねあきた。あゝ、嬉うれしやー渾沌こんとんとして
黄色きいろい、夏なつの夜よるの蒸暑むしあつい肚はらに宿やどつて、身からだ體だ一つ黒くろく
蠢うごめく、此このまゝ蝮まむしに生なり攣かりさうな中なかに、一い夫ふ
人じんの顔かほが白しろかつた。

幸福さいはひ、雌めすの蝮まむしでない。

其その美うつくし顔かほを熟ぞつと見みると、大尉たいゐは、目めが覺さめ
たやうになつたが、髪かみも黒くろし、蚊帳かやも青あをし、常じやう燈とう
明みやうの火ひも赤あかい。

「おい、」

とも言いはずで、遮しや二無にむ二、腕かひなを髪かみに潜くゞらし、横合よこあひ

から接唇きつすをと思ふおもと、舌したがめら／＼と出さうでで成らなぬ。戦をのいてにじり退さがつた。

手ても先まづ、腕かひなも忍しのぶべし。唇くちびるを、と寄よせては毒氣どくきを吹ふき炎ほのを吐はいて、煮上にえあがる肝きものために、夫人ふじんの膚はだが立たち處どころに斑ぶちに成なりさう。

「何なんだ。えゝ！」

とぼつたり疊たゝみに手てを支ついたかと思ふおもと、突立つゝたち上あがつて、蚊帳かやを頭づ突つきに、天てん井じやうへ、食かり附つきたく、苛々いら／＼と成なつて、髪かみを掴つかんで、ドンと倒たふれた。

「ウム、」

と幽かすかに、夫人ふじんは寝返ねがえる。

「江崎さん、最う寝られましたかい。」

餘所から歸つて、上人が、法衣を脱いだ膚襦袢のなりで、禪を緩く、但し埒ない緊め方をしたのではなからう。痩せさらばへた腰の骨に、紐を痛んで、たわいなく、背に附着いた下腹を、おのづと摺下る、畚に跨いだ、股も蚊細く、竹の杖で繼足したやうな膝のあたりを、水玉に立つ浪、これは又娑婆つ氣な團扇で、ばた／＼と蚊を追ひながら、常燈明の上へ、入道天窓で、脚長く立顯れたが、返事もせぬ蚊帳を覗いて、少時して言つた。

「はゝあ、お若い同士ぢや。些と蠅酒でも喫らしやれぬと…はツはツはツ。」

高笑ひを團扇拍子で、ばつさ、ばつさ、と其のまゝ方丈へ引返したは、何處かで一杯般若湯召したものと見える。

此の聲を何處に居て聞いたか、

「ふえへ、」

尼の其の仇白い笑が、煙のやうに縁で立つた。

其から續いて、しと／＼と歩行いて來たのが、猫

の聲音のやうに響いて、丁ど机の前あたりで留まる
と、ニヤーゴと鳴く。

さて／＼紛はしいが、矢張猫が附いて來たのであ
つた。

戸袋の兩戸を、かた／＼と引出しながら、

「鼠を捕れよ。」

と尼が言ふ。

ニヤーゴ。

「鼠を捕れよ、蜥蜴、守宮、蛙、長蟲、銜へて來

まいぞ。」

ニヤーゴ。

「汝は夏兒ぢやえの、又蚊帳の外で、ぴち／＼尻
尾鎌首勿ねさすな。」ニヤーゴ、と鳴いたが、稍細
く成つて庭で聞えた。猫は胸を伸して、倒にトンと
外へ出たのであつた。

「眞個に／＼、當寺の御本尊様は猫がお嫌ぢや申
して喃、幾個飼うても、つい育たぬえ。古寺なれば
鼠が荒れて、傘までも喰裂きますけに、お寺の
損耗は年に積つて、どれだけか分りませぬ。猫一匹
飼ひたうござります。御了簡遊ばされ、お見免がし
下さりませい云うて、私がお願ひ申したればこそ、

そない好う肥えてぢやえ。眞個にえの、無駄な殺生せまいぞよ、南無阿彌陀佛。

と一枚戸、がた／＼と引閉てたが、急に忙しさうな足取で、ばた、ばた、ばた／＼、膝きりの腰巻で、摺足の呼吸も吐かず、仰向いて、目を据ゑて、ちよこ／＼走りの氣勢を立て、瞬く間に雨戸を繰つたが、やがて、本堂を隔てた向の縁で、ごろ／＼と遠雷の如く聞えて、一寂と成る。

其は、其處で雨戸を閉め果てた響きであつたが、此の折から、薄く、且弱い電が、本堂の前へ黄色く射した。

ト全身を颯と染めて、衝と階の上へ顯れた大尉は、其の時、わな／＼、手に小刀を拵つて居たのである。

夜陰に辿り着く廻國者のためと云ひ、何と云ひ、近頃は濱あるきして遅く歸る夫婦のためにも、階の上だけは、本堂の正面一枚、暑くもあるし、閉めずに置く。

大尉は其處へ、小刀を手にして突立つた。然らぬだに神経の過敏な處、午から寸隙なく惑亂し苦悶した折もこそあれ、和尚の蝮酒、尼が猫話。

一時 癩癩の發作に赫と成つて、渠等を刺殺しも仕
兼まい機會ながら、非ず、目ざすは、彼處の卵塔場。
…
彼は辛うじて、人の寢静まるのを待ち得たのであ
る。

言ふまでもなく跣足で下りた。

颯と又雷に送られて、ひら／＼と閃めくが如
く卵塔場へ入つたが、樹立の闇を貫いて、ト四邊を
みまはした顔の色は物凄い。

曇りはしたが月はある。けれども、田圃の榛の梢
と、山の尾の間にかゝつて、燻したやうに圓に黒い。

其の月を蔽うた雲の端が、黄色に環取られて、其處から迸らすやうに時々雷がする。

畦には鼓草、山には菜の花の幻が澆と開く。

風は生温く海から吹くが、其の空は晴渡つて、未だに、手を引きつれた白地の少いのが、ちらほらしさう。月も其方から見れば澄んで居よう。夜が、海と山と二つに分れて、月も玉と土とがありさうな景色である。

大尉の作業は、月暗き中に、敵弾を浴びつゝ、土壘を築く、歩兵の如くはじめられた。

土を撫で、草を分け、砂を引掻いて廻る。豫て用意した燧火の、時々、ニと燃えて消えるのが、火を曳く弾丸の落ちて走るが如くに見える。

點けては消し、點けては消し、瓜の皮も、貝殻も掴んだが、蝮の軀は見當らぬ。時には仰いで、樹の枝も差覗いた。引かゝつても居ようかと。――勿論手鞠の外れたのを、獵犬が銜へ出すほど手もなく探し出せようとは豫期しなかつたが、恚うまで手数が係らうとも思はなかつた。卵塔場は、前にも言つ

た二十坪には足りない處へ、手は届かぬ、と言つても丈隠す葎ではない。草の生えたも隅々で、樹立の下の晝も暗いだけの事、眞中は蛇の目に土が出て、墓の數も、蛇を隠すほど密着いたものではないのに。

大尉は寶玉を求むるものゝ熱心で、殆ど、掌で卵塔場を撫盡さうと足掻き立てる。其の草を這ふ處が、我ながら何か可厭なものに肖て見えた。

可、夥間なら早く出る、で、露には濡れる、土には塗れる。瞬く間に髪が伸びて、蓬々と成らないばかり。しどろもどろで、卵塔場を呼吸忙しく泳いで居ると、時はやがて小半時、何の塚あたりで始まつたか、何でも樹の根を引掻いたと思ふ時分から、墓を這ふものが別に又他に最う一人ある？ 氣勢

がし出す。 … -

草がざわ／＼と鳴れば、ざわ／＼と鳴る。衣が摺れれば衣が摺れる、吻と呼吸を吐けば、呼吸を吐く。其が必ず、大尉の後へは續かないで、前に立つて、と恚う這身に屈んだ額のあたりに、尾か、後足か、何しろある。で矢張と恚う這身に屈む。

が、額か、角か、鎌首か、其は分らぬ。――燧火を

摺つて鬩せば何にもない。又畜生に燧火は燃せまい。

うむと手を伸ばすと、前でも、うむと手を伸ばす。膝を立てれば膝を立てる。爪立てば矢張り爪立つ。

ぬつくと立てば、立揚る。焦れて、樹を揺れば、むら／＼と枝が鳴る。生暖い風が吹く。

月を、と見れば仇白く、莞りと嘲笑つて、雲が瞼のやうに、ぶるりと震ふ。

大尉は火のやうに成つた。

「尼か。」

と思はず空に訊いた。

何にも答へぬ。

最一つ烈しく樹を揺ぶる、と又揺ぶる。手を出す
と、手を伸ばす。地蹈鞞踏むと、地蹈鞞踏む。

「誰だ！」

と掠れ聲を絞つたが、聲は自分の聲である。

「己か。」

と言つて、野狸が樂書したやうな月に向つて、二
ヤリと齒を白く獨りで笑つた。

「己だ！」

と自から返事をして、

「うむ、己だ。矢張己だ、何だい。」

「ご、別に者のあつて存するが如く、錯覺したのは氣の迷ひだ、と稍と心付いたが、はじめて心付くと最う直ぐに又、草を探すと、最う、既に又誰か、草を探す音が、同じく額のあたりで前立ちに成つて遣つゝ居る。」

大尉は、魂を抜かれたやうに、フト思つた。這奴自分の眞似をするのではなく、自分が彼の者に導かれて、草の中を這ふのである。

「蠅？」

と屹と成つて、

「き様、蠅か。」

と得も言はれぬ聲して聞く。

其のとき、黄味を帯びた白いものが、怪しい月の前にぼうと立つて、

「蠅ぢやえ。」

と、えたいは知れず、皺喰れつゝも、仇媚かし
い婦の聲。

大尉の耳はぐわんと鳴る。呀！

鐘が、鐘が鳴る、鐘が響く、あれ／＼鐘が揺れる。
ぐら／＼と揺ぎ始めて、鐘樓を、づんんと落ちた。
が、縦に、のつくり、山の缺片の如く、眞黒に壓し
て来て、夢中で駈出した大尉の足を、折戸口で、ぐ
わつと塞いだ。

為に、大盤石をウンと嚙んで、下腹へ詰つたやう
に立竦むと、龍頭を開いて、碯と睨む、いぼ／＼立
つた偉大なる蠅の鎌首。

途端に、颯と電！

「江、江、江崎、江崎順吉だぞツ。」

誰だと思ふ、我は海軍の大尉なり、と犇と小刀を
逆手に取る。

まだ電の消えない一秒、風を溶いて流したや

うな黄色い足許、眩くばかりゆら／＼と動いた、
と思ふと、釣鐘が浮いて、膨れて、影薄く朦朧とし
て艦に成る。

敵艦來れり。

時に遠雷が、ぐわうと聞えて、どろ／＼と笏を返す。

大尉が乗つた水雷艇は、暗の海を、大鮫の翻るが如く、荒海に腹を縫はせつゝ、彼の龍宮の墓の如き、敵艦の舷を死黙して衝と過つた。

爾時水雷を發射した。

思ふ間もなく、目を開くと、釣鐘はぐらりと成つて、敵艦傾けりと見るや否や、一幅廣く浴げせかける黄色い光は、蒼い額、白い服を照し出だして、大粒な雨が、はら／＼と降りかゝる。

同時に逆立つ煽りの波に、のた打つ如く浮いつ沈みつ、顔を曝らす、手を握る、一人の脊が伸びたと思ふと、艇のスクリップを操る冴に、すつくと二ツに胸が切れる。血は黒く、潮は白く、探海燈の餘波は蒼い。ソレ黄色い顔、切れた首、筒服が流れる、腕が擦げる、鼻の長い犬が、犬が、葡萄酒の目を眞赤にして、海豚のやうに泳ぎ上る、ト忽ち海は、

繁吹ばかりの闇夜と成つて、水の底にも國ありや、
高きオオケストラの樂に合せて、歌唄ふ聲が、から
／＼と貝の破れるやうな音を傳へると、渠等を導く
天の使者歟、片割月を美しく彩つたやうな鸚鵡が一
羽、手足と漕ぎ行く、我が水雷艇の舷をかけて
飛ぶぞ、と見たが

百日紅に電が射したのであつた。

鐘は依然として、鐘樓に。けれども、夜は

大きくなるものだ、とやうに据つて居た。

「然うか。あゝ、」

大尉は片折戸に吻と息した。

「馬鹿な事を！艦と共に、幾百の敵を屠つた己で

はないか。何だ！

蝮の一疋二疋、皆こりや病氣の所為だ。はゝは。」

と呵々と笑つたが、笑ふ後から眉が顰んで、

「神経衰弱も國家のためだ。が、蝮の生肝を呑

んだのは妻のためだ。——然うだ 美しい、

唯見ると、釣鐘の膚が、むつくり動いて、鳴らぬ
響が、ブンと來ると、耳がぐわんと鳴つたと思ふ

と、動くわ、其の鐘、揺れるわ、掉れるわ、ぐらり
ノ、と廂を覗いて、渦を捲くや、中空へ衝と飛んで、
月を離れ、山を離れ、雲の中に躍込むと、ぐるノ、
と一つ廻つて、忽ち、ぐわんぐわらん、ぐわんぐわ
らんと 逆に 翻り、西へ、東へ、南へ、北へ、
向を替へ、龍頭を捻つて、大口を開いて、大尉の頭
上を狙ひ下りに落して来る。

「わつ、」と叫ぶと、どしんと、棟瓦へものゝ
音。此の音を、氣の付く咄嗟に、大尉は丁ど

蝮の鎌首ぐらゐのものだ、と思つた。

「貴下、貴下。」と眠さうな夫人の聲。

大尉は蚊帳の中で、我に返つて、扱は夢か、と思
つた。が、續けて、一段高い蒲團の上から、夫人が
横顔で、うつとりしながら言ふのを聞くと

「何處へ行つて在らしたの、今時分。」

其には答へないで、少時して、

「何時だ。」

と辛うじて言つたが、早や其の返事はなしに、夫人はすや／＼と小さな寢息。今の言に因ると、惱ましい身體で、ふと目が覺めて、夫が傍に居ないのが心細かつたのを、聊か怨んだらしかつた。で、安心が出来たと見える。

大尉が茫然と毛布の上に――

身内を探ると知れたが――砂だらけに成つて胡坐掻いた方を向いた、蒲團の端を丸げたのが、こんもり向う高に成つて、頷いたらしく可愛い顫をつけた枕と鼻とすれ／＼の横顔で、眉が浮上つたやうに見えた。はらりと前髪の崩れた額のあたり、雪が溶けさうに汗ばんだが、敷いた夜具の襲なつたばかりでも、暑いと覺しく、乳を白う、胸を反らすばかり仰向けに掻卷を乗出した。浴衣の襟の下あたりが、何となく微紅の色の映す。手はぐつたりとしたのを、強ひて力づけたやうに柔かに曲げて、花に蕊ある如く、指の尖が未開紅なる唇に觸れて居た。

熟と見た時、つと思つた事は、どれ一ツ。が僅に
其の眞似ばかりも出来なかつた。何故と言へ、皆
盡く人間離れのした、蝮の思、蛇の心、最う一つ
言へば生肝が然う考へさせるのであるかの如く感じ
たからである。

譬へば、夫人の其の高い衾の寝姿は、爰に砂だら
け、草だらけに成つて、戦に敗れた大童の阿
修羅が、腹巻かなぐり取つて、臍腑を掴み出さうと
するのを慰め顔の、天女ぞと拜まれる。

處で、其の腕に縋れば、此の苦惱は救はれ
よう、が、尻尾で絡みつくやうで出来なかつた。其
の唇に觸るれば、蒼い、腥い、肝の臭は消
える。が、齒が鍼に成つて刺りさうで為得なんだ。

其の胸を枕にすれば、鳴りはためく鐘の音は失せて、
微妙な音楽が聞えよう、けれども、へろ／＼と舌が
出さうで淺猿しい。我が淺猿しさは斷念めても、可
愛や、最惜む女の生命がなからう。

況や だ、心ばかり扱帯のあたり被いだ絹の
ふつくりとある 片足屈めた裳か知らず、夫人

は、帯の五月目。

「坊か、」

など、撫でるが如きは、鎌首が、ソレ引切られた
胸中へ逆に摺返つて、白眼で嚙むに齊しい。 . . .

大尉は居窘まつてぶる／＼と身震した。

あゝ、昨夜までの夫婦の語ひは、生肝のために、
今や蝮の了簡。大尉は指の尖も觸れ得ず。現下の我
相好を見られる辛さに、離れて居て、呼覚す事さへ
成らぬ。

「うん、うん、うん、！」

と細く、長く、呻吟く聲が、本堂の裏から抜けて、
梁を傳つて煤のやうに振ら下る。

「うう、むにや／＼ . . .」

で、やがて脚長上人が魘されて居るのが知れた。
成程。

汚い、夜具風呂敷を、擴げたやうな蚊帳が、疊へ
這つた體に、本堂を隔てた差對向、臺所の障子の前
に釣つてある。――

方丈は暑いから、縁を繞つて入る松原の風を憧
がれて、端近に寝さつしやる、其の中で、

「うう、蛇ぢや、蝮ぢや。」

と怯えたやうに叫んだ。

尼にの寝ねぐさげな、粘ねばつた聲こゑが、

「蚊帳かやの外そとにかい。また猫ねこずらえの。」と言いつ

たが、和尚をしやうの聲こゑは其切それきりで、一ツ、ぐう、と云いふ大おほきな寝息ねいき。

「夢ゆめかや、やれ。」

と獨ひとり言ごと。

暫時しばらく、寂しんと成なつて、

「ふえへ、」

と笑やつた。が、ふはりと蚊帳かやを煽あふるやうで、蒸暑いきれ

臭くさく、遠とほく此方こなたへ傳つたはる。

大尉たいゐは、兩りやうの耳みみに拇指おやゆびの栓せんを加くはつて、夫人ふじんの枕頭まくらもと

へ眞俯まうつむけ向むに突伏つツぶした。

で、動うごくと、腹はらで摺すつて、身からだ體たが這はいひさうで成なら

ぬから、鐵棒かなぼうのやうに靜じつと成なる。

何なにかふはノと天窓あたまに觸さはつた。

「比丘びくづく入にふ、又また一つ笑わらひ居をつた。」

と切齒はが嚙みをすると、又またふはりと來きた。

矢張り、笑が来て、仇白く、凭れ懸るのだ、と思つて、手を出して、搔拂つたが、何にもない。尤も聲が手に觸るべき次第はない。

が、如何にも形あるものゝ如く、又ふはりと来る。

尼の笑は、其の魂を吐くのだな、と考へた。

待て、魂にも形はなからう。但し色はある。其の色は、尼が口を開けたやうに仇白からう、と顔を上げたが、何にも見えぬ。

蚊帳の裾が煽るのもなかつた。

フト心付くと、枕をこぼれて、片頬に敷いた夫人の後れ毛が、襲ねた蒲團を餘つて、はら／＼とかるのであつた。

然までに丈長い夫人の髪は、晩方、一絞り絞つた

まゝ、無雑作に束ねてあつたが、恰も雲の漾ふ如く、頸を包んで、肩に流れて、空ざまに翻したら、梁を拂ふであらう。胸に、一團の暖い雪があれば、こゝ

に千筋の柳を束ぬる。

頭を撫で、觸つたのが、夫人の髪であつたと知れる、と忽ち其の微細な管から、清涼劑を注射さ

れたやうに、咽喉がすつきりと通つて、目も清しく、常澄明も、暗くはあるが、不斷の灯の色に成つた。

其の明に、寝顔を透かして、大尉は、密と指を出して、鬢の毛尖に觸つて見る、と、心が通ふか、脈が響くか、頷くやうに、そよりとする。すら／＼と掌に靡く。

危ぶみ惶れた、我が手が觸れても、それが、白髪にも針にもならぬので、心地も清々しく、はじめて莞爾と微笑んで、可、呼起して見よう。――否、醫師も靜かに寝よ、と云つた。妻は今夜病人である。

起さぬまでも名を呼ばう。

「光子、」

と言はうとした時である。

指にかゝつた、髪の毛の末、優しく細く、戦ぐのは可い、が、唯見ると、戦ぐ其の毛筋を傳つて、鬢の邊が一握み、恚う、むず／＼と呼吸吐くやうに動いて居る。伸びるやうで、縮むやうで、亂るゝやうで、渦くやうで。其のゆら／＼と成る中に、照々と艶を持つて、底から湧いて出る如く、むくれ上つて、煌々と蒼く光る、潮の餘波が宛然、鱗！

「蠅！」

と一聲、無手と壓へた。殆ど、發作的に握つたまゝ、
右手を離れぬ小刀がキラリと、蚊帳の目を閃いて落
ちると、根元から弗と切つた。

其の六尺にも餘るのが、筋を揃へて、一搦。切つた
トタンに、粘つて冷たく、きり／＼と巻いて腕に絡
んだ。

「やつ！」

と叫んで、搔るが如く、蚊帳を起身で飛出しざま
に、ぶる／＼と揮つて、引かなぐつて、すたりと投
げる。や、のしと音して、板敷へ水を流し
たやうに落ちたが、灣を描き、圓になり、波状をな
して、ぐる／＼と環を閉ぢつ開きつ、何と、ずる／
＼と動いて板敷を向うへ、迸出す。

と引寄せるが如き、手を、蚊帳から出した、尼は片
手で、破蚊帳の裾を捲きつゝ、ふはり、腰布の黄
色のを支膝で、のそ／＼と這ひ寄つて、遠くから
搔込む状して、さらりと其の黒髪を胸に抱く、抱く
と、黒く、丈に餘つて、煮染めたやうな肌襦袢――
だけ着て居た――の胸に餘つて、胴を畝らして
匆々と見えた。主を慕つて争ふ如きを、無手

と壓へて、のそりと、背向いて、其のまゝ蚊帳へ引込まうとした。

「あれえ。」

ざんばら髪を頸で亂して、わなゝき／＼、小刀持つ大尉の手に取継つた夫人を、背後に突退け、躍り懸つて、大尉が、

「尼！」

「お主あ！」

と和尚が、これも顔の色を變へて、骨まで蒼く成つて、長い脚を骸骨の如く、がた／＼と踏はだけ、蚊帳を捲つて、突然、尼の手を掴まうとしたが、

「わい。」

と舌を嚙んで、尻持を突いたも道理。尼のぶよ／＼した乳の間から、蝮の鎌首がに／＼と顔出す。

大尉も思はず、たじ／＼と退つたが、伏し轉ぶ夫人を、脚で圍うて、

「髪を返せ。」

と夢中で言ふ。

「おう、」

と答へて、もそりと立つと、胸を両手で抱きながら、よろ／＼と足を振りつゝも、走り蒐るが如くに衝と

寄つて、正面に顔を見せたが、すく／＼と眉毛が透く。
常燈明の轉瞬くと一所に、ぶる／＼

と瞼を震はし、大尉の顔を見上げながら、

「ふえへ、」

と笑つて、

「肝を返しやいの、生肝を返しやいの。」

「返す！」

と、くわつと開いた口が、仇白い笑に吸込まれた。

「きやつ、」

と泣いて匆ね起きて遁げながら倒れる夫人を、脚長

上人が、ぐら／＼と抱留めて、

「南無阿彌陀佛、南無阿彌陀佛。」

と念佛をぶる／＼震はす。

ドタ／＼と物音して、猫が人の中を駈廻つた。

其の時、内陣の扉に、カタリと音がしたやうだつた。

月の晴れたやうな、端巖微妙な 倅が、ふと人だ

けの大きに見えて、

「見苦しい、汝達。」

と聞えたが、其の後は知らなかつた。

「——と大尉は後に

人に語つた。——

尼は、と聞くと、

彼の女は、大尉に執着して、

夫人の長き黒髪を嫉んだのであつた。

が、大尉に先じて卵塔場を探つた蝮の首と、呪詛ひ

得た髪を抱いて、ふいと東雲に寺を出た。

【完】